Bulletin of the Faculty of Education
The Department of Educational Psychology
1984, Vol. 31, 1 – 23.

心理治療過程に現れた治療者像とその機能（II）

――母性喪失体験をもつ男性・女性クライエントの夢分析を通して――

田畑　治

I　問題と目的

自らの問題を抱え，生き方に苦悩し援助を求めて治療者の前に立ち現れるクライエントは，何を感じ，何を生きつつあるのだろうか。そしてまたそのように援助を求めて来談したクライエントの前に座る治療者(=援助者)としてのこの私とは，いったい何者であるのか。またどのような治療的機能を果すのであろうか。

このような基本的な問いかけをして，前報（田畑，1983）では，たびたび入・退院を繰り返えし，休職中であった32歳の重症対人恐怖症者（男性）の心理治療過程で持ち出された‘夢日記’を媒介にして，夢分析を行ったものを報告した。そして，そこでは夢に象徴化されたり，暗黙に伝達される“治療者”の像と機能を，いくつかに分類することができた。

しかし，前報における分類は，たまたまクライエントが夢を頻繁に見ており，それを‘夢日記’に記していたために，そのように機能的に分類された夢がこのクライエントに独自なものか，そうでなく普遍的なものであるのかは今後の問題として残された。またこのクライエントは，治療者と同性（＝男性）であることによって，そのようになるのか，あるいは‘発達的落差’(田畑，1977)によってそのようなことが生じるのか，などについては今後の検討課題として残された。さらにまたクライエントの精神病理性との関連でも，“single case”での機能に限定されないかとの問題が残された。

そこで，今回は，治療者とほぼ同一年齢，同年輩のクライエントの場合に，どのような治療者像が浮かび上ってくるのか。また治療者と同性の場合と異性の場合とで，その差異はどうなのかを問題意識に据えて検討することにする。

ところで本研究のクライエントは，つぎのような共通点をもっている。いずれのクライエントともに，幼少期に母性はく奪体験ないし母性喪失体験をもち，さらには“見捨てられ不安”を根底的に払拭しきれないまま，その後の人生を生きながらえてきていること。また児童期ないし青年期に，ともにその母親を病気で喪失していること。したがって，心理治療過程で，“対象喪失”（object loss）および“悲哀の作業”（mourning work）がテーマになるであろうこと（小此木，1983）などであった。また精神病理的には，男性クライエントの方は，対人恐怖（とりわけ女性恐怖），抑うつ，自信喪失などを呈し，同一性混乱（モラトリアム型）のケースと考えられ，女性クライエントの方は，母子関係障害，内面と外面の分裂状態，劣等感，空虚感，自己不確実感を伴う性同一性障害のケースと考えられる。しかし両ケースとも，表面的な日常生活にはさして大きな障害はなかった。

両ケースのもう一つの共通点は，治療への動機づけが高く，知的にも高いと考えられることであった。さらに両ケースとも，‘夢’をきちんとレポート用紙に記述し持参してきたことである。この点，両ケースの場合の夢分析へのレディネスの十分さも指摘できるであろう。

つぎに筆者の治療的態度および両ケースの治療構造について，あらかじめ明らかにしておく。筆者の治療的態度は，まずクライエントが基本的に治療場面を安全であり，安心でき，信頼のおける場であると感じるよう，最大限の配慮をする。そして，バーバルな側面だけでなく，ノンバーバルな側面にも注目する。話題や夢は，どんな内容であれ，ちょうど波間に身をおき，水面を漂うような心境（free floating attention or equally hovoring attention; Freud, S.）で共体験的に聴いていく。そして，心にひっかかったり，納得いかない部分を，クライエントに連想してもらい，一切解釈はしない態度である。その際，クライエントの夢に対する感情や自由連想はつとめて重んじようとしている。治療者のイメージとしては，図のようにちょうど波間にポカポカ浮かびながら，クライエントが海面下数メートルのところから水面に発音し

たり，発信したりする信号を受けとる心境である。そのときの態度は，共感的に腹の底に響かせつつ聴きとる態度である。そしてそのような発信が水深２，３メートルからなのか，海嶺からなのか，海淵からなのか，どのような感じの岩肌をしているのかを，クライエントの感情と自由連想によって，聴きとっているように思われる。Gendlin（1964）に従えば，クライエントの“structure unbound”なもの（夢体験）に，感情と自由連想をさせることによって，ダイレクト・レファラント（直接の照合）をさせつつあるというふうに，これらの治療的態度を説明することもできるであろう。

さらに筆者の治療場面での構造（前田，1981）に言及しておこう。外的構造要因に関しては，一対一の場面設定であり，対面法をとる。そして時間的配置としては一週間に一回であり，一回の面接時間は50分である。また治療期間は，男性クライエントには限定しないでいた。女性クライエントの場合は，クライエントの特徴から外面のチグハグさを自覚してくるまで，初めは限定し（10回制限法），後に無限定とした。治療形態は，外来通所治療であり，治療費用は公的には無料であるが，クライエントの切実な申し出により謝意として受けとめる場合があった。

また内面的（心理的）構造要因に関しては，治療契約，すなわち契約内容，治療意欲，治療方針や面接ルールへの理解や協力の程度について相互に確認することを約束した。また面接は，毎回予約制をとって行っていくことにした。もちろん面接のルールは，治療者とクライエント双方が信頼感を発揮できるために，基本的には受容的，共体験的態度をとっていった。

そもそも夢は，クライエントの自由な話題の表明の中で，除々に信頼感が醸成されてくる過程で，たまたま持ち出されるものである。したがって，夢分析といっても，正統派精神分析（前田，1984）のようなものでなく，クライエントが夢を話題にしながら治療者はクライエントの感情や自由連想を共体験的に聴きながら，クライエントの内的世界を共有するよう努める結果になるのであって，基本的には“治療関係”を重んじた取り組みであるといえよう。

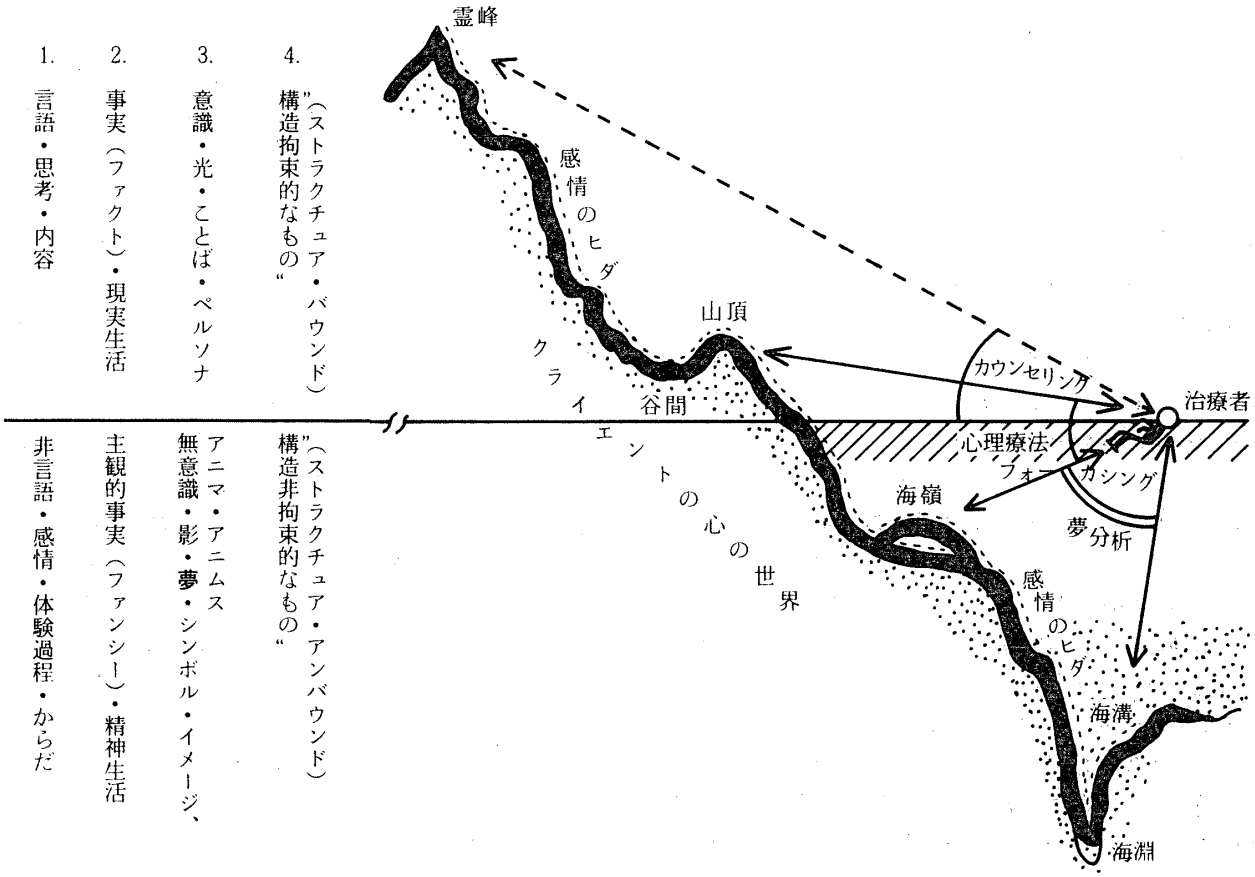

図　カウンセリング・心理療法・フォーカシング・夢分析におけるクライエントの心の世界に共体験する治療者の深さと拡がりのイメージ

以上のような問題意識，治療的態度および治療構造を明らかにしたところで，本稿の目的はつぎのようなことを検討することである。

1. 母性喪失体験をもつ，治療者と同年の男性・女性のクライエントにおける，心理治療過程で扱われた夢の分析を通して，そこに映し出されたり，浮かび上ってきたと思われる治療者像をとり上げ，各治療段階ごとに，治療者の行為および機能の変遷を明らかにすること。

2. その際，先の報告（田畑，1983）で分類された治療者の機能分類カテゴリーを用い，その客観性や有効性を再吟味すること。

3. これらのクライエントの治療関係ならびに治療効果を，夢に現れた自己像との関連で評価すること。

Ⅱ 事　例

事 例 A

1. 事例の概要

竹元三男（仮名）男性　来談時40歳1カ月。既婚。某会社課長。あるカウンセリング学習会で，筆者に個人カウンセリングを受けたいと涙ながら訴えてきた。

1）主　訴

「人間関係全般がスムーズにいかない。自分が自由に出せない。自分を否定的にみてしまう。」という訴えであった。

2）家族構成

5人家族である。本人（父親）は，大学院を修了し，インテリ風の表情であるが，神経は繊細である。体格は細身で，性格は真面目そのものである。妻（35歳）は，短大卒で，幼稚園教諭の身である。性格的にはしっかりし，仕事熱心である。子どもは小5の長男（10歳）を筆頭に，小2の二男（8歳），幼稚園の三男（6歳）の3人である。

3）問題の発生と経過

本人の述べるところによると，高校時代頃から，自分は何がやりたいのか，何をすべきなのかがはっきりしていなかった。大学進学に際しては，ある乗物が好きで，理工系学部を選択した。学生時代にも，はっきりした目的もなく，ひとりぼっちであった。別に何もすることもできず，無為にすごし，教養部で1年留年した。学部進学後も何とはなしにすごし，他の学生同様に大学院に進学し，修士を修了した。修了後，民間の某会社に入社した。入社後7年たって，自己鍛練のために，禅や剣道に通うようになるが，はじめは気が入らず，行ったり行かなかったりであった。4年前から本格的に剣道を開始し，現在有段者であるが，もう一つ自分というものに確信がもてないでいた。

2年前から，そろそろ年齢的に課長の口がかかることに耐えられなくなり，転身を計りたいと考え，某所で若手の精神科医にカウンセリングを受け始めた。しかし14，5回通ったが，これ以上続けても自己破壊につながるということで，双方納得の上で“中断”することになった。来談1年前に，将来カウンセラーに転身したいといって，某大学の編入試験を受けたが，結果は不合格であった。

来談当時，勤務先の職場での対人関係，特に部下の女子社員との間に，対人的距離がとれず過度に緊張し，極度に自信喪失状態であった。

本人は5人兄姉の末っ子として誕生し，乳児期から母親が病気（肺結核）で入・退院を繰り返えし，伯母（母方）にめんどうをみてもらって育った。その母親は，本人が小4か5年頃に病死した。父親はすぐそのあと後妻を迎えたが，本人はずっと馴染めなかった，という。

4）来談時における総合所見と援助目標

本人は，来談時自責的で抑うつ的であり，対人恐怖（特に女性恐怖），自信欠乏を主な精神症状としている。幼少期からの母親との対人関係の“喪失体験”をベースに，それ以降の対人関係における進取性や親密さも欠除している。本事例は，自我同一性混乱の状態にあると考え，治療場面で温い人間関係をしつらえながら，クライエントが安全感，安心感，そして信頼感をまず獲得できるようにし，さらに“自分のもの”を再確立していくよう心がけるようにした。

2. 治療過程――治療者像を中心に

このクライエント（以下C1.と略記）は，カウンセリング過程で，某年6月8日（＃5）から4年後6月25日（＃126）までに，全部で46個の夢を報告した。本稿ではこのうち主題と関連した，しかもかなり明白なものをとり上げることにする。このような主題と関係する夢は，Ⅰ期―1個，Ⅱ期―1個，Ⅲ期―2個，Ⅳ期―4個，Ⅴ期―5個，Ⅵ期―2個で，合計15個（全体の夢に占める比率は32.6％）であった。

Ⅰ期：前進不能・方向の混乱した自己・“人影”への脅え

この時期は，主に言葉を媒介として治療関係を結んでいった。治療面接の初回（＃1，某年5月12日）から31回目（翌年4月12日）までである。

この時期は，C1.が職場や日常生活場面での現状での対人的苦境，過去の家庭の状況，実母との病死による離別，そして継母の存在等を，涙ながらに語ることが多かった。そしてまたこの苦境を打開するため，転身し心機巻き直したい意向も示す時期であり，具体的には会社の課長からフリーの主任にしてもらい，大学再受験に挑む

時期でもあった。Co.にも煮え切らない態度を指摘され，Cl.は暗礁に乗り上げてしまい，捨てばちなことば―「自分にはもう甘えられる人がいない！」と泣き出してしまうこともみられた。一度挑戦した大学（医学部）の入学試験に，あと一歩実力不足で失敗し，目標喪失をして混乱してしまう。

夢は，たまたま全く自発的に表明されるが，心理治療過程での話題の一つとして，特に連想もきかないですましていた。この時期の夢は，全部で7個報告されたが，治療者像としては，つぎのものがみられた。残りの夢はCl.の自己像に関するものであった。

夢⑤　今朝方の夢。「女房と外国から帰ってくる。車で進んでいくと2本の柱が立っている門に差しかかる。ハンドルを切ってもまわらない。ダンプが来てバックする。女房がジグザグにバックする。自分はイライラする。女房は車で，自分は歩いて進む。門の向うについて腹が立つので女房を蹴っとばす。女房の妹がいて『Audio展に行こう』と誘う。」（#16）→《2本の柱がある門は，クライエントの出身大学の正門を連想することができる。その門に差しかかってダンプ（治療者像）が近づいて，Cl.あとずさりをするが，内心イライラして女房を蹴とばしてしまう。》

Ⅱ期：進路変更の再挑戦・定まらない自己

この時期は，治療面接の32回目（翌年4月19日）から58回目（翌々年3月28日）までの約1年間である。すなわちCl.は一度試みた大学受験に失敗し，目標喪失感にさいなまれ，頭が空っぽになる体験をする。そして，面接を続けていくなかで，自分の根源的不安に意識の上で気づきはじめる（#32）。そして自分が脅やかされていたのは，女の人への“外傷体験”から生じる恐怖心であることを除々に覚知するようになっていく（#33～35）。そして女の人に近づいて，やさしくされたいということを表明するようになる。この頃は，くやし涙や情ない涙はみられなくなり，むしろうれし涙がみられるようになっていく（#37）。そして自分の気持をコントロールできる感じになってきたことを表明するようになる。しかしまだまだ他人（女性や剣道場で指導する子ども）に十分に距離がとれないで戸惑ってしまう（#40）。

カウンセリング学習の会合にも併行して出席し，自己の体験も語っていく（#39，43，45，48，49）。そして“自分のもの”を求めて，さらに探究をすすめていく。また大学受験の際に直面した自己の色神異常の恐れも初めて表明する。また自分が他人に押されっ放しになるのは，継母が甘やかして，厳しくなかったことによると表明し，継母へのアグレッションも表出した。本気で叱ったり，怒ることの大切さも言語化していった（#49）。

この後にCl.は再び大学（医学部）への再挑戦をしていくが，自分が色神異常であることに躊ちょしたり，傷つくことを恐れていた（#55）。

この時期の夢は3個と少なく，治療者像は1個である。

夢⑩「会社の同僚で健康的で仕事もてきぱきやる人が『まだ処理しかねているのか！』と大きい声で言った。その人が誰かに言ったのかもしれないが，自分は自分に言われているように感じ，自分でそうだなーと考えた。」（#57）→《処理しかねているというのは自分の性分によく似ている。》

この時期には，大学再受験やカウンセリング学習会での体験でへっぴり腰でびくついているCl.に対して，Co.はかなりストレートにCo.の気持を本気で伝達していたことの反映として，夢⑩が現われている。

Ⅲ期：転身・自己敗北宣言・自我同一性拡散の自覚

この時期は，治療面接の59回目（翌々年4月4日）から90回目（3年目3月24日）までの約1年間である。この時期は，Cl.が念願の大学入試に合格し，職場の人間関係の束薄から解放され，自由であると感じる大学へのパスポートを得ることのできた時期である。しかし会社を退社するにあたって，自分は“敗北したこと”を認めるに至る時期でもある。会社の送別会でCl.は「怒らない人」との寸評をうけるが，Cl.自身は「怒れない人間である」ことを告白したという（#59）。

念願の人間的接触ができるという“医学”の門に入るが再び同学年の仲間，とりわけCl.と年齢の近い女子学生との間にぎこちなさを感じるようになる。対人緊張はまだ残り，ゼミで予習を遅延させていて立往生した体験を苦笑まじりに表明する。またゼミの文献で“留年＝スチューデント・アパシー”を扱い，自分の心理とそっくり同じであることも認める（#62，63）。そして自分の弱さへの気づきをするようになり，父親への反抗が欠如したり，同性の異質の友だち（腕白・権太坊主）との仲間関係が欠如していることを自覚するに至る（#64）。

Co.はこの時期から，Cl.が夢を見た場合，メモして持参するよう要請した。Cl.は夢⑪からは，レポート用紙に記録し，コピーを作って持参するようになった。夢⑩を報告して以後，約1年目から“夢分析”を開始したことになる。

この時期の夢は7個であるが，治療過程に現れた治療者像は，つぎの2つである。

夢⑬　3/7朝の夢。「ホテルの最上階の広間《お寺の塔の最上層の広間のよう》で，数学通論の試験が始ろうとしている。部屋は電灯がついているが薄暗い。床には机のかわりにフトンが数列に敷いてあり，中央の最前列に座っており，隣りにM君がいる。余り気にせず，よくわからないところを教壇にいる中年の女性に質問する。自分が考えていたとおりで少々得意な気持ちである。試験直前の見通しがはかどらずイライ

ラしている。試験開始10分前になった。“山”はかけずに全体を見直そうと思い，もっと落ちつけるところで独りでやろうと思い部屋を出る。部屋の周囲は廊下があって，手すりがある。出た正面に垂直なハシゴがある。本を片手に一段下りる。怖かった。ハシゴはずうっと下に続いている。この調子だと時間が足りないと思い，恐る恐る昇って，部屋の壁にもたれてひとりでやる。((中略)) 見通しが進まないのでイライラしてまた場所を変える。移動して屋根のようなところに座ると樋がたわんでひやりとする。勉強していると，右手から男と女の人が出てくる。男の人は黒っぽい服装でやくざ風。その人が私をまたいですぐ左手から降りようとする。またいだとき顔に衣服がさわり一瞬何も見えず嫌な感じがした。その人が降りるとき樋が大きくたわみ，私は巻き添えで落とされた。多分生垣か何かの上に落ちて助かるという予感がした。いつの間にか上にいて試験の時間がきた。((後略))」(#89)

→((前は人の姿とか顔が墨絵みたいだったのが，今度のはハッキリしていた。夢の感じは，パッと開けて見晴らしがよかった。自分は試験前は，昔から独りでないと落ちつかない。))

#90で，Cl.はまず夢よりも話したいこととして，カウンセリング学習会のメンバーZさんが自分に好意を示したことを語る。Cl.はZさんを“永遠の女性”と感じ，可愛いい女性であり，自分が受容される感じであると，感激の涙を流しながら語った。

夢⑭　3/14朝の夢。「郷里の実家。夜。トイレのところが部屋になっていてそこに居る。庭に出ると隣家に通じる戸が開いているのに気づく。眼を凝らしてみると誰かが侵入している。大声を出して何か呼んだ。やっとしわがれ声が出た。侵入者は，戸から一旦外に出て，また中に入り，南の生垣にプールに飛び込むように逃げる。すると生垣が実はガラス張りだったらしく，ガラスが四方に飛び散り，侵入者は飛び込んだ勢いのまま外に突き抜けたような気がする。

今度は，5,6人の男性が入ってくる。場所は同じところのような気がする。巾が広い皮のバンドを締め，物々しいいでたちで海賊のような感じがする。制止するが言うことを聞かない。賊は『ちゃんと侵入の目的はある』というようなことを口走ったような気がする。いつの間にか，賊は‘川’の正面図((土木計画図))を開げて，そこに道路か何かの線が書き込んである。」(#90)→((侵入者には怖かった。以下略))

Ⅳ期：夢による自己内探究①－敵の撃退・被受容・勇気

この時期は，治療面接の91回目（3年目4月5日）から107回目（同9月25日）までの約6カ月間である。この間，Cl.はほぼ毎回のように，レポート用紙に記録した夢を持参してきた。“夢分析”が本格的に行われ，Cl.は刻明なメモを作って来室した。いわば夢を通しての，自己内探究の本格化の時期である。夢は14個報告された。

夢⑯　4/4朝方の夢。「郷里の実家の庭。夜でうす暗い。庭の南端が土手みたいになっている。他にも数人の人とその上にいる。誰かが腹ばいになって踏んばっている。みると土手が倒れるように力を加えている。やはり土手が倒れてしまう。急いで倒れた土手を起し終り，仕上げをしていると，東の方から戦車のような重いものが進んでくる。まだ土手がしっかりしていないので，これは大変だと思う。心配したとうり，再び土手が倒れ，今度は下の方で作業していた人が下敷きになり死亡する。再度（土手を）起して修復作業をする。」(#91)→((庭の南端に野菜市場があり，そこに小6時の“権太坊主”がいた。戦車は敵・味方でいえば，味方である。‘援軍’という感じ。援軍にうまく連絡がとれていず，まとまりがなく，壊されてしまう。来るべきでないときに来た。この夢は，怖くなく，淡々としていた。))

夢㉒　6/1の朝9時。「何処かの和室でエンカウンター・グループに参加している。左手に若い女性，右手に1,2人置いてタバタ先生。自分は左手の女性に話しかけるが，途中から何をどう言えばよいのかわからず混乱する。タバタ先生が右手の壁ぎわに沿って横になってしまう。見ると退屈そう。その女性をみると，いつの間にか大変怒った表情になっている。自分は当惑する。」(#98)→((女の人はWさんの感じ。‘here and now’で動く人。タバタ先生は，S先生（女）のようにぶぜんとしてひっくりかえってた感じ。自分は「ヘェー！」という感じがした。))

夢㉘　9/10朝の夢。「場所は不明。目のクリニック。午前中に予約してある。何かの理由で遅くなり，到着したら他に2人しかいない。女院長がその2人に『今日は午前中で終了したので治療できない』と告げる。自分は予約してあったことを告げるも断られる。急に自分は文句を言い始める。院長をやり込める。院長は会長と相談している。自分は散々言いたいことを言って，いよいよ帰ろうとする。最後に一言何かいう。突然院長がその一言で器具を貸出そうと思っていたが貸せないという。自分はしまった！と思う。仕方なく立ち去ろうとするが，突然何が何でも泣きついて借りようという気持が湧き，嘆願する。院長が急に気が狂ったように大声をあげてワッと抱きつく。貸してもらえることがわかる。((以下略))。」(#105)→((自分はあることでスジを通そうと頑張ることがある。嘆願したのは自分でも意外だった。))

夢㉙　9/17朝の夢。「どこかから車で帰る途中。ゆるい登り坂。登り切ったあたりに婦人警官が立って『右の方へ廻れ』と合図しているのが見える。近くにいくとすぐその向うに右折する道があることがわかりその手前まで直進する。交差点で信号のため停車する。発進すると下り坂。向うから，左側を子どもたちがマラソンか何かで次々と登ってくる。道幅が狭いので右に寄って進む。ところどころ非常に狭いところがある。雪が積もっていて，滑りやすいなと思った。遂に道が右側から狭まり，前方にやゝ低い位置に，新しい道が始っているところにくる。右下から左上に伸びている土手があり，一旦停止して偵察に行く。停止信号待ちの間を利用して，道の様子をみるために右手の斜面を登る。

この斜面は山を崩して造成中らしく，やわらかで上にはオバサン達がタオルをかぶって働いている。上から土砂が降ってくる。登ってから斜面が意外にきついことに気づいて動けない。男の人もいて身軽るに斜面を動きまわり，地面の中で働いている人に何か連絡している。（地面が動いて地中で人が働いているのがわかる。）車で女房がイライラしているだろうと思う。どうしても動けないので大きく深呼吸をする。とたんに目が覚めてホッとする。」(#106)→((こういう道は，

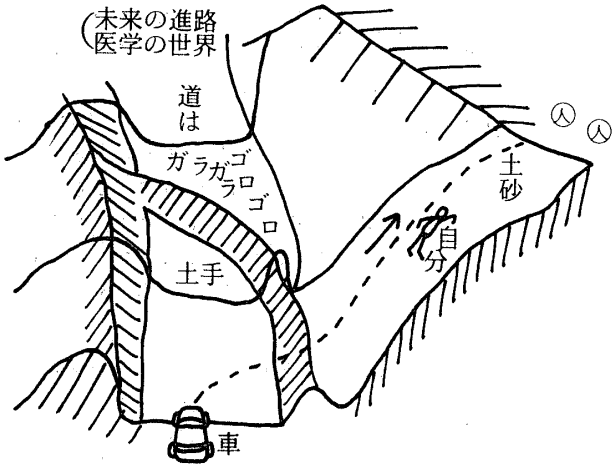

図１　＃106の夢㉙の視覚化した図

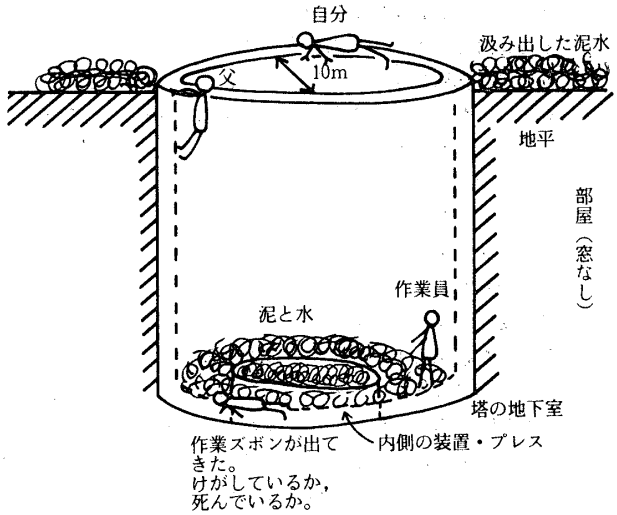

図２　＃108の夢㉚の視覚化した図

以前にもあった。ボーンと突き進めば大丈夫みたいだが，その反面ダメージを受けそうな感じもする。≪Co. 進路への先行き不安の夢と解釈する。≫))

なお＃107でCl. は“永遠の女性”であるＺさんが某男性と結婚することを知ったと表明し，自分の気持が真実であったのだろうか，冷える気持になることを力を落として告白する。Co. はCl. へ対峙し，激励や勇気づけを行う。“信頼”の情は，失なわれるものでないし，結婚によって崩れるものではないことを伝達する。

Ⅴ期：夢による自己内探究②――“喪失した両親”との邂逅→安全な道案内を受ける自己・挑戦

この時期は，治療面接の108回目（３年目10月２日）から116回目（同12月18日）までの約３カ月間である。夢記録を持参してくるなかで，Cl. はいよいよ深淵の探究を行い，喪失した父親，そして引き続いて母親を治療者と共に探り当てることになる。夢の中の治療者像は，“作業する人”であり，“友だち”であるところがとても印象深い。Cl. は心の深層に押し沈めていた“喪失した両親”と再びめぐり会うことができることになった。

この時期には８個の夢が報告された。

夢㉚　9/26（日）午後1時30分の夢。「円形に壁で囲った丸い部屋にいる。天井もあって部屋の内部は裸電球があってもやゝ薄暗い。部屋の中に，さらに丸く防禦壁で囲った部分があり，その内部は深く掘り込まれて何かの装置が設置されている。今は，何か事故があったのか水と泥がたまり，埋まっている。誰かが汲みだしている。私と父はその上にいて，上から見降ろすようにして作業をみている。父が両手で囲いの上端に手をかけ，足を内側の壁にかけて上に上ろうとするので「危い！」という。作業する人が泥や水をかえ出していって，かなり作業が計どり，掘り出したもので，囲いの外側が埋りかかっている。誰かが中で生き埋め（？）になっているような気がする。作業ズボンの一部らしきものが出てくる。」((＃108）→((内側の装置は修復されたらまた動くと思う。内側の装置はプレスみたいな物をつくる装置である。))≪Co. は精神分析でいう精神装置→ボーリング→夢分析の作業員（＝治療者）を連想する。≫

夢㉜　10/11朝の夢。「誰か友達とペアを組んで何かをすることになっている。既に途中までは済まし，期限に余裕があるので中断状態にしてある。別の友達（進行責任者）がきて『心配だから残りをやってほしい』と親切に言ってくれる。調べると丸々使える日は２日しかない。相談して明日から２回にわけて済ませてしまうことにして別れる。別れていきながら，その友達が『場所の予約をしておこうか』というので『ハイ，アリガトウ』と返事をする。((中略)) そのあと，間借りしている家に着く。部屋に入ってスイッチを入れるがつかない。誰かが中にいる気配。少し恐くなって外へ逃げる。入口のところでみていると電気がつく。大声で幾度もドロボーと叫ぼうとするが，かすれ声しか出ない。東京の姉が少し離れたところを通りかかるが，気づいたか気づかないのか，相手にせず遠ざかっていく。遂に中から女の人が出てくる。年配40～50歳の女の人で母親か？　何か（母は）“何を言っているの？”というような意味のことを言いながらそのまま行ってしまう。そこで目が覚めた。」(＃109）→((叫ぼうとしても声が出なかった。母が家の中から出てきて，やっぱり怖くなかった。やっぱりそうだったという感じ。女の人は，京塚昌子のような人。肝っ玉母さん。姉が何で知らんふりをして通り過ぎたか不思議。身振りで通じたと思う。))

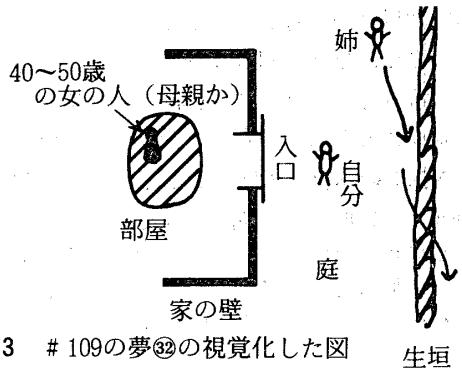

図３　＃109の夢㉜の視覚化した図

夢㉝「どこか家の中。家の中の何処かで水漏れがあり，水がしみ出てくる。上の方の真四角の明るい部屋に上る。兄の部屋か。その部屋の壁の一部から家の内部にもぐり込む。最初に父が，次に私と息子が続く。一人で一杯になる狭い階段を登っていく。すぐ暗くなって，父が私達にも見えるようにその足元を照しながら進む。私が息子にスイッチを入れるように頼む。何とか成功して後方から光がくる。先にいく父はどんどん行ってしまう。いつの間にか，狭い螺旋階段を下っている。だんだん水平になる。クモの巣をかきわけて進む。それで最初の人は大変だろうと思う。// いつの間にか線路の架線にぶら下って進んでいく。既に前方では，水漏れの原因が判明したらしい。架線で引上げてもらうこととなり，一旦，下方に網が張ってあるところまで戻る。架線は白い被覆のかかったものとワイヤーのものと2本からなり，一方には電流が流れている。引上げてもらう時に地上の構造物にふれるとショートする危険がある。どちらが安全か，地上にいる外人の女性に尋ねると「白い被覆の方だ」と答える。みると被覆に刻印が浮き出ている。いよいよこれから引上げてもらう。」（#110）→《全体にわりあい平静な感じであった。父ということでメモするとき，タバタ先生が浮かんだ。外人の女性の先生は英語のヒアリングの先生。》

#111でCl.は，近頃の自分は，“自己否定的”でなくなっている，との述壊をする。こう思ったのは，この日曜日に剣道の試合にあまり行きたくないな，行く必要を感じなくなったな，と感じていた。そういう気持で試合に出たら，試合開始後ものの一分も経たないうちに，一本取られ，このとき“みじめな自分”を感じた。ほんとうに久しぶりだなと感じ，また剣道が自分と遠くなったのを感じた，という。

夢㉞　11/20早朝の夢。「誰か男の人と一緒に，鉱山の採掘場に調査のために来ている。作業環境が悪く，職業病が発生したりして問題になっているところである。山側の人に案内されて山を登っていく。埃がもうもうとしている。『当時はもっとひどい埃だった』と案内者が教えてくれる。山の斜面に設置してあるキャビネットのところで書類を調べ，そのあとさらに上に登る。《中略》上に登って家にもどる。海水浴場の休憩所のような家で，隣家とは腰板で隔てられているだけである。人が沢山いる。家の中に兄もいる。」（#112）→《職業病はケイ肺。鉱山は露天掘り。キャビネットは会社でしょっちゅう使っていた。兄とはひとりの大人として付き合っている。》≪Co.の連想：Cl.の母親は，Cl.が幼少期に肺結核が原因で，Cl.が小5のとき病死。≫

夢㊲　12/18の夢。「旅館かホテルの広間に大勢の人と一緒にいる。何かの順番が定っていて，その逆の順から面接（風呂？）に行くこととなる。戻って来た人が『行ってきたよ』という。湯か面接に行くときに名札をつけることとなり，布切れに名前を書いて出す。順番が近づいたので，皆と出かける。途中，名札をもらうために，ロビーの靴修理コーナーに立寄る。カウンターの上に沢山の名札が盛り上げてある。自分のものをみつけて『これだ』と担当の人に知らせるのだが，いつの間にか自分のものがなくなっている。担当の人と一緒に探すがみつからない。再び名札を作ることとなる。担当の人が黒い台布に明るいグレーの布を付ける。担当の人は，急に『自分で作れ』という。布切れでは駄目で『周囲に縁どりを付けよ』という。周囲の人々も一緒に非難した結果，担当の人が作ってくれることとなる。その頃から，他の担当者が歩き回りながら左方の誰かと（熱心に）軽口を叩いて話し始める。」（#116）→《先週から塾と勉強会で自分がどうなるかよくわからなくなって気分がわるく自己嫌悪に陥っていた。名前がない，名札がない。名札を自分で作らないで人に依頼するのを連想した。担当の人は，タバタ先生。》

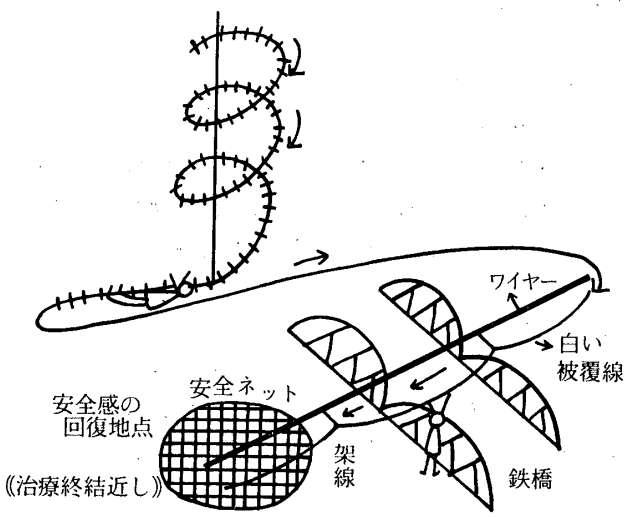

図4　#110の夢㉝の視覚化した図

Ⅵ期：夢による自己対決・自己統合，そして終結

この時期は，いよいよ治療面接が大詰めを迎え，Cl.自ら終結を申し出ることになる。治療面接は117回目（4年目1月22日）から127回目（最終回）（同9月10日）までの9カ月間であるが，Cl.は現実に大学の履習（解剖実習等）で多忙になってきたこともあり，4月以降は結局3回の面接しかできなかった。

この間に報告された夢は，全部で10個であった。Cl.はこれまで悩まされた女性を攻撃したり，目付きの鋭い大きい男の人とハンマーで応戦することができ，Co.も治療終結が間近いことを感じとっていた。そして夢㊸で“別れ”のテーマが述べられることになる。こうして足がけ5年の治療面接は大団円を迎えたのである。

夢㊶　3/11早朝の夢。「幅の広い階段だけが上からずっと下まで続いている。薄暗くて下の方はかすんでよく見えない。上からはロープが垂直に垂れ下がり，私はそれを頼りにして降りている。体育の先生らしき人が勢い余って何段か下に落ちる。私も，先生が踏みはずしたところ《そこだけ青色》にたどりつく。その段は，重みをかけるとゆるんでいて，少し前に傾く。妻も降りてくる。一段下に降りて少し傾くことを妻に説明しようとするが，誰かがその段にもたれていてうまくいかぬ。」（#121）→《オリンピックの聖火を運ぶ階段。ロープは上にもってくれている人がいる。神様かタバタ先生。

芥川の『くもの巣』のように，水面があってもモヤモヤしている。体育の先生は身体が大きくてガッチリしている，中年男性。青色は海，外灯のあかり，うす明るい，公園の中のうす明るい。))≪Co.の連想：Cl.はCo.に絶対の信頼と安全を感じている。≫

＃122でCl.は，かの“永遠の女性”Zさんの結婚式に友人仲間として招待され，双方がお互いに相手の印象を伝え合うというスピーチをうまくやることができた，という。心に一つの節目ができ，「これからは自分で出ていき，自分の偽らない気持で動いていきたい。いまその勇気が湧いてきた。」としみじみ述べたのが印象的であった。《Cl.は夢㊳でZさんとの訣別を行っている。》

夢㊸　3/22朝の夢。「企画中のお祭さわぎのポスター四角い飛行船“△△△FLIGHT”を作り，日本各地の基地からの連絡を受けて，寄港しながら列島を縦断する。空から見た日本列島の情景。// 日本列島の南側の沿岸をプカプカと流下る。岩だらけの海岸を飛び飛びに寄りながら進む。海底をみると，それでも若い芽がところどころ出かかっている。島（四国）を廻り込むところで，別の流れに押し流されて，疏水のような所に入る。左手は壁になり，その壁の上は街((観光のマチ))になっている。そこを流れるときは，人々が上から別れを惜んでパラパラと水をかけてくれる。すぐにトンネルになり，地下にどんどん入っていく。流れは空気のように透明で，水面から底を眺めながら流れる。底は道路のようで人々が下から歩いてくる。トンネルの向うから目つきの鋭い大きい顔の男の人がくる。他にも男の人が近くを流れている。先程の男性が引き返してくる。下から襲ってくるので，私はハンマーで応戦する。ついにトンネルの出口らしきところに出る。そこは屋根のヒサシが何重にも重ってついている。手で屋根の端をつかんで登っていく。これで絶対安全と確信する。」(＃123)→((日本列島を下っていくのはおもしろそうだなーという気分だった。トンネル内は明るく，電気がついていた。自然の雄大さ，人々との別れ，若い芽が海底から生えていて印象的であった。))≪Co.の連想：Cl.は治療面接に“別れ”を告げ，自己の“影”とも対峙し，かつまたひとりで雄々しく，勇敢に目つきの鋭い大きい顔の男の人と“対決”できるようになっていると感じる。≫

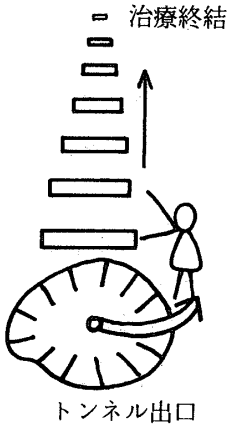

図5　＃123の夢㊸の後半部の視覚化した図

夢㊻　6/16 AM 4：00の夢。「郷里の家の庭。飼犬がきて喜んで私の顔をペロペロとなめる。私は顔が犬と同じ高さになる位，身を低め，犬の陰になってソロソロと南の庭の方へ進む。もう一匹がすぐ近くになってから，とうとう私に気付き，やはりじゃれつく。実は私は，その二匹を闘犬のように互いに闘わせることをときどきしている。(闘わせる場面が浮ぶ)。闘わせるときは，犬の筋肉を強力なものと交換し，原動機を取りつけるというところで目が覚めた。」(＃126)→((変な感じがした夢。筋肉をかえるというのは，解剖実習をしているからと思った。人は知らなくて，知っている人は知っていない。ふだん知っている人には見せない。別のときやっている。解剖実習は20回終り，あと40回ある。6/21中間試問があった。あまりよくはなかったが合格だった。犬――少年時代『ノラクロ』をよく読んだ。互いに闘わせる――二男が子どもマンガで『闘犬吹雪』をドッサリ買ってきた。そのテーマは，父犬か母犬が秋田犬の山犬みたいになる。その生れたのが吹雪号である。おもしろかった。))

この夢㊻は，一連の夢の最後のものである。Cl.の連想にもあるように，すでにこの夢は現実夢（＝解剖実習に夢中になっているCl.の見た夢）である。そして何よりも“闘犬”は，“女々しい男性”イメージでなく，“逞しく闘う男性”イメージに満ちている。

＃127（最終回）には夢を持参せず，6月以降，夏休み中の生活を語っていった。Co.の何よりも驚ろきは，日焼けした，血色のよい逞しい表情でCl.が来室したことであった。4月から自己修練にヨガを自室でやり始めたとも語り，他人にも“若返った”といわれているとのことであった。そして「第一段として終りたい」，その理由は①学業が多忙になったこともあるが，自分を否定的に見ないで済むようになった，②主訴の対人関係で戸惑わなくなった，③身が硬くなり，コチコチになる原因はつかみ切れていないが，当面は大丈夫であるなど確信があるからである，とのことばを残して，治療者のもとを去っていった。

事　例　B

1.　事例の概要

西空あかね（仮名）女性　来談時41歳10カ月。既婚。元幼稚園教諭であったが，現在は無職で主婦専業である。ある大学教授に出したカウンセリング依頼の手紙がもとで筆者がひき受けることになった。

1）主　　訴

「自分を見つめてみたい」というものであるが，中味は，自分の生育の問題，家族（夫と子ども）の問題を含む中年女性の自己実現を阻む心理的問題が複雑に絡んでいる様子であった。

2）家族構成

4人家族である。本人（妻）は，短大を卒業している

が，その後通信教育で幼稚園教諭の免許も取得している。勉強家であり，読書家である。性格は，自分の中に“硬さ”があり，外面をとりつくろうが，内面は空っぽで満たされていないという劣等感が強い。夫は公務員であり，職場での人望も篤い人である。やさしく，他人に思いやりのある人である。二人は見合結婚をしたが，子どもがない。それで二人の里子を養育している。小6の男子（11歳）と小4の男子（9歳）である。

3）本人の生活歴

乳幼児期は戦時下であったため，いつ空襲に遭うかわからない状態であったため，両親は上の子どもと共に甲信越地方に疎開させた。かすかな記憶に，祖母（母方）と入浴するのを拒否したこと，疎開先から居なくなった両親を慕って，バス停の方を指さしていたことなどが残っている。両親とも高学歴（いずれも大学卒）でインテリであるが，本人は“抱かれたりした体験”がない。下の弟たちは両親の愛情に恵まれて育ったため，底抜けに明るいし，抱擁心に富んでおり，人の痛みのわかる子である。

児童期に終戦を迎え，関東の両親のもとに帰る段になって，祖母の家を離れずに泣き叫んだという。小3頃まで“指しゃぶり”をしていたとのことを母親からきいたことがある。西空の夕日の酉色にいつも“悲しさ”を覚えた，という。本事例の仮名は，このイメージで命名した。

思春期・青年期：中学時代は活発であった。高校時代は一応“非行”という名のつくものは一通りやったという。一度睡眠薬を服用して自殺未遂に終ったこともある。短大時代にアルバイトで遅くなり，母親に厳しく叱られたが，すごく反抗した。父親は遅くなったことに触れず早く入浴して休むよう言われた。床の中で自分は悪いことはもうよそうと思った。床の中で大声で泣いていた。

母親は，おおらかで親分肌のところがあった。後に母親は悪性腫瘍に罹り，病床に長く伏していた頃でも，逆に自分を慰めてくれた。しかし自分は，幼少期の“見捨てられ体験”があって，どうしても素直になれなかった。その母親も自分たちの結婚直前に死亡する。

4）問題の発生と経過《略》

5）来談時の総合所見と援助目標

本人は，乳幼児期に“母性的養育の喪失体験”（maternal deprivation），“見捨てられ体験”をもち，その後思春期・青年期に行動化（acting out）を起こしている。また夫との間の夫婦生活にも円滑にいかない状態をひき起している。自らの性同一性の障害を起し，自覚的には心的硬直性，内・外の分裂状態，自己確実性の欠如感，空虚感，抑うつ感にさいなまれていることが伺える。対人関係におけるさまざまな問題は，本人の乳幼児期の“抱擁されなかった怨み”を，母親につら当てしていくかたちで起こしているかのようである。本人は，知性化によって，一応現実の家庭生活は切り抜けてきているように考えられる。

援助目標としては，事例1と同様に，“母性喪失体験”に悩まされ，抑うつ的になっている本人に，治療場面を温かく，受容的なものにしつらえ，クライエントが安全感，安心感，そして信頼感をまず獲得していけるようにすること，そして治療関係が十分に確立してからは，クライエントが自己探究や自己直面していくことをより促進できるように，治療者も積極的能動的にストレートな感情表明もする必要があること（田畑，1984）などを心がけ設定していった。

本事例の心理治療過程で行った“夢分析”も，クライエントの上記のような消極的受動的なカウンセリングから，積極的能動的取り組みの産物であるといえる。

2. 治療過程――治療者像を中心に

このクライエント（以下Cl.は，カウンセリング過程で，某年12月20日（＃22）から翌々年7月9日（＃84）までに全部で50個の夢を報告した。そして事例1の場合と同様に，主題と関連する夢は，Ⅰ期―0，Ⅱ期―1個，Ⅲ期―5個，Ⅳ期―5個，Ⅴ期―3個であり，報告された夢全体に占める割合は，28.0％であった。

Ⅰ期：試行的カウンセリング：自分の生い立ち・現状

この時期は，主に言葉を媒介としてのカウンセリングが10回に限って行われた。＃1（5月10日）から＃10（7月16日）までであった。この間，Cl.は自分の生い立ち，過去から現在にかけての問題の発生と経過を語り，母親への怨み，夫のやさしさや思いやりなどを表明していった。そして毎回のようにCl.は自分の問題に向いあっていくさまを，自分でもとても新鮮であると感激しながら語り，次第にCo.へも好意感情を少しずつ表明するようになっていく。自分のカウンセリング体験の不思議さについても表明していく。そして面接を10回で終るということは，自分が“重症でないということなのか”と疑問も提起した。また子育てに対する夫との意見対立が浮き彫りにされてくる。

10回の制限的な面接の中で，Cl.は夫，子ども，近隣との関係を肯定的に表明していくようになるが，Cl.の中にある硬さ，両親との関係，異性との関係では未解決の課題があることを明確化していき，さらに自分が“一人前”でないことも意識の上で自覚していった。面接にやってきても何よりもCo.に気遣いするCl.は，おどお

どして核心の問題にまだ迫ることができにくいことであった。そこで双方了解の上，2カ月後から本格的カウンセリングを開始することを約束した。

この時期は，夢は全く報告されていない。しかし，Cl.は後に#39の面接で，「Co.にあまり好感をもっていなく，プライドの強い人」との印象をもっていたと述べている。多分に，Co.に警戒心ももっていたCl.である。

Ⅱ期：本格的カウンセリング：母へのアンビバレンス・男性イメージの混乱・自分に“根”がない

この時期は，治療面接の11回目（9月20日）から35回目（翌年4月18日）までの約半年間である。Cl.はCo.の受容的，非断定的で待つことのできる態度に支えられて，自分および自分にかかわりのある人との対人関係をどんどん深めていき，双方で治療面接が楽しみになっていく。そしてCl.は，今までの自分は“遠心的”に他人に関心を向けていたが，今の自分は“求心的”に自分をみつめることができるようになってきていることを表明する。そして自分の性にまつわる㊙の話も，ポロリとするようになる。しかし全体としてはCl.は書物（専門書や文学書など）からの借用した知識を裏づけにしながら，いま一つ“生”の感情を十分に吐露しきれないでいた。

この時期は，夢は自発的に3個報告される。そのうち一つは，治療者像に関するものである。

夢③　一週間前（4/3か4/4）頃の夢。「日本で有名なテニスの選手の人。その人の奥さんが料理がうまいというのを何かで，読んだことがある。その奥さんと夫婦のこと。その奥さんが“私”。テニス選手が“あの人（＝夫）”であると思う。その選手が，白い丸い硬球で，ラケットの中央に当てたものすごい強いストレートのサーブを入れる。私はそれを受けて，気に入っている。それで2人の性的な関係がうまくいっている。そのうちに，私がもっと大きな，色のついた楕円形のボールの方が好きになる。すると相手が白い，丸い硬球を打ち込むと，またうまく受けることができる夢」（#34）→《自分はあとで白さ，無垢というのを連想。丸さとか楕円とか，何かしらと思っていろいろ考えていた。《Cl.うれしそうに，ある意味でさびしそうに。》自分は何かとっても大事なことを見逃がしてきているのではないか。そういうことを思うと，自分は恐いようでゾッとする《半分涙ぐみつつ》。》

なおⅠ期と同様に，Cl.は#39で，この時期のCo.を「有名大学出身のCo.への憧れがある。関東の規制や枠が強い学風に対し，関西の“魂”があり，自由な学風をもつCo.に憧れる」とか「ある本で“夢子”のケースにCo.が“力”になり，それを読んだ自分も励みになった」と語り，治療面接場面でのCl.の肯定的治療者像の知覚として夢の治療者像とともに参考になるので記しておく。

Cl.は夢②（#33；3月22日）を報告してから，Co.は夢分析への導入と接触を開始するよう，Cl.に伝達した。

Ⅲ期：夢による自己内探究①――叔父殺し（そして母殺し）・湖面への旅・自己の問題性への深淵での直面

この時期は，治療面接の36回目（翌年4月26日）から56回目（同11月16日）までの約7カ月近くの期間である。この期間に，Cl.はそれまでの自己責任転嫁の意識が薄らぎ，諸事象（性，夫婦関係，対人関係のそっけなさ）の根源は自分自身の中に問題性をはらんでいるのではないかという自覚や気づきを，ますます鋭く行うようになっていく。そして“自我分裂”（M. Klein），を起こしていた自分を明確に自覚するようになる。それはちょうど夏目漱石が鏡子夫人に対したときの関係と似ているという。漱石は自我分裂を起こしていた，とCl.はいう。

Cl.はほぼ毎回のように，レポート用紙にかなり長く記した夢を継続的に持参するようになり，本格的に夢分析を受ける覚悟で来室しはじめたことがCo.にもはっきりわかるようになる。さらにこのCl.は，レポート用紙をそっくりそのままCo.に手渡してしまうが，夢の記述された内容や表現を完全に暗記しており，このCl.の記憶力の鮮明さを感じることができた。

この時期には，夢は15個（夢⑧は2個と数える）報告された。主題に関連する夢は，そのうちの5個であった。

なお#39の面接で，このCl.がCo.を知覚したり，体験したことでは「甘えられる自分，怖がらなくてもいい自分」《母性的体験》，「性体験をしている自分，受身から能動への転回を感じる自分」《性愛的体験，能動的体験》，そして「Co.がわたしの中に入ってきた。そのことで自分が他人を信頼していいという原体験をした」《信頼の原体験》といったことが表明された。Cl.はCo.にすっかり信頼感や親密感，さらには性愛感を感じてきていることが伺える。

Cl.は#39に上記のような体験をすることを通して，以下のように治療者と夢の作業にとり組んでいくことをレポートしてきた。

夢⑥〈夢メモ記録〉「夢を見なければならない。今見ているのは夢ではないのか？　現実の生活ではないのだから，夢だったのか。――と思いながら寝ていた。複雑な長いお話だった。でも大急ぎで忘れていった。『私は誰かと2人である家をたずねた。医者をしている夫の叔父の家で，夫が幼少期に過ごしていた家。この家をたずねる者は皆2人で行くことになっているらしい。目的は叔父を殺すため。叔父はそれを知っていて，どこかに逃れていて留守。同じ目的で夫のいとこ達が何人か来ている。その中には，叔父を殺させまいとする者も何人かいて，互に体をぶつけて争っている。私は，こうしている間に，叔父がどこかで死んだという知らせが入るかもしれないと思い，そうしたらずい分悲しいだろうと思った。

少し離れた隣に（実在なのか不明）母の居場所があって，叔父殺しはそこへ行くための前段階であるかもしれないし，母の代りであったかもしれない。』」（＃41）→《目覚めたとき，なぜ殺さなくてはならないのかを考えた。夫の叔父――夫の母の兄，今90歳。叔父の家に，私の母と彼《夫》の母が訪ねていったことがある。２人で行く――誰かとペアになる。いままで１人だったのに，２人がいった。みんなが2人できた。相手も戦ってくれた。叔父――Ｔ大医学部卒。子ども６人いる。みんな教員にした。長男《50歳》はＭＤＩで２年前から休職中。田舎では，精神病者が出ることは好まない。それなのに，叔父は“ありのまま“を話してくれた。身体をぶっつける――取っ組み合いで，自分もその渦中にいる。叔父の居場所の隣りが，母の居場所。》

夢⑧〈メモ記録〉6/12明け方の夢。「円形の湖があり，深い水の色をたたえている。周りは斜面になっていて，ほとんどの部分は，ジャングルのように木がおい茂っている。陽あたりのよい一部分に，木が一定の間隔をおかれて三通り程植えられている。私は，リュックサックのようなものを背負って，そこを歩いている。木の植えられているのを見て，めずらしい植え方で面白いと思いながらそれに添って下って行く。歩きながら，側の人（多分夫か）に，色んな話をしている。相手（夫？）は，全部聞き終えてしまうと，私の話した内容（砂）を大きく５つ位に分けて，一部分ずつ，真実かどうかについて問いかけてきた。大きなシャベルで地面を掘り返えしながら。私は『自分の思ったとおりを話したのだ』と答えながら，真実は別のところにあるのだと思い，それを相手に伝えることのできない自分がもどかしかった。」（＃42）→《円形の湖―摩周湖を思い出す。湖におりられない。その情景全体が私の心。ジャングルのように木がおい茂っている―カウンセリングで整理されていない部分。陽あたりのよい部分―カウンセリングで整理された部分。リュックサックのようなものを背負う―配偶者との性の問題，長いこと途絶えている。このまま背負っていけないこともない。話していた内容は忘れたが，心の奥の底の方を話していたと思う。５つ位――５つのうち１つにものすごい涙が出そうな感じがしていた。シャベル――ケーキをすくうようなもので，グサッと分けた。真実は別のところにある――私が人をみるときの人のこと。私の見方ではそうだが，他の人（相手）はそう思っていないかもしれない。それを相手に伝えることのできない自分――私という人間と生活してきた相手は大変だったんじゃあないか。後への見方は，幻想化しているのか？　歪んでいるのか？》

夢⑩　9/15明け方の夢。〈夢メモ記録〉「家で私は子供（or弟）と２人で笑ったりしゃべったりしている。これから家族で３泊４日の旅行に出かけるところ。中学の同級生だったＴくんが訪ねてきて，隣室で主人と何やら楽しげに話している。『旅行に行く途中で映画を観ていくことになった。家でごはんを食べて出かけよう』と。主人が隣室から出て来て，私に言った。私はゴハンを２合炊いてあった。４人で分けて食べればよいと思って，Ｔくんに一緒に食べて行くようにすすめた。それから戸棚の中を探して，のりつくなんかでお茶漬けにしようかと思った。（出かける前で何もないから）。ピーナッツを出そうとして，床にこぼしてしまった。子供は拾ったり食べたりした。私も拾ったり，食べたりしながら，手の平にあったピーナッツを５つばかりＴくんに手渡した。ピーナッツはふとっていて，まんまるでどんぐりみたいな形をしていた。

私は，これから観る映画について，パンフレットを見ながら，Ｔくんに順を追って話をした。雪の中の別れのあるシーンがある映画で，私はとても詳しい説明をしていた。説明しながら，今までとてもステキだと思い込んでいた主演男優がわりとつまらない人だったと気がついた。ロシア人の体の大きいたくましい男性だった。私は，Ｔくんと並んで手などつなぎながら，この映画を観たい，と思った。主人は，家のまん中にデンと存在していた。遠くで電車の音が聞こえたので，場所は，私の育った所（××県×市）だと思う。」（＃53）→《家―××の実家，３泊４日――下の子ども（Ｓ）が夏の自然の学校に出かけたあとの連想。Ｔくん――いつかの手紙の人，中学時代のライバルだったかも。黒いセーターの人。家に来た――分裂機制がうまくいくと理想自我としてＴをとり入れるし，満足“感謝”が起る。“羨望”というのは残る。今度挑戦するときは，Ｔを受け容れる。映画――ある晩電話がかかって，夫婦で『ハムレット』を見に行ったという話。４人――子ども，昔なら家族の弟と思う。出かける前，何もない――家にいて旅に出るのに食べ物のない家に呼んで，自分が見栄っぱりでなくなった。ピーナッツ――まん丸いドングリのように太った自分。この夏，少し太った。ありのままの自分を出していいという感じ。映画――テーマ，題名はわからない。雪の中――郷里のイメージ。別れのシーン――具体的にはわからない。今日夢をもってこようとしていた自分，ある日だめだった。次もダメだった。あー待てよ，今まで見ていたと思っていたら沢山もっていた。翌日になると忘れてしまう。“別れのシーン”というのは出てくる。主演男優，わりとつまらない人，ロシア人の体のたくましい男性――自分と付き合いのある男性。Ｔくんと手をつなぐ――自分の内から湧き上ってくる，中学の時以来会っていない，個性的な人，自分の生き方のしっかりした人。（イメージは？）親密なる異性，タバタ先生のような人かも。アレヨアレヨと行ってしまう。》

夢⑭　10/20朝の夢。「小学校時代の宿直室に夜集る。自分の家では，子どもを夜出すことを禁止する。それなのに，宿直室で10人ぐらいの“グループ”があり，タバタ先生が“ファシリテーター”で，メンバーにまんべんなく“暖かい眼なざし”を向けている。自分は，左隣りの小学時代の女の子で，父親がなく，母親，兄との３人の母子家庭の子で，苦労している子で，身体つきはヤセ細っている同級生と，母の弟の子《イトコ》でやはりヤセ細っている女の子が眠っているところに，自分の羽織っているカーディガンをそおっとかけてあげた。≪うれしそうに≫他のメンバーは，顔見知りでない人もいた。」（＃53）→《昔は，小・中学校時代は，先生と担任クラスの子はつながりが深かった。中学校に行っても，“親しい男の先生”のところである。休憩のとき，話したいと思ったこと話せた。タバタ先生が，まなざしを他の人と同じように向けてくださること，現実の先生が夢の中に現われたのがおもしろくて!?　今までは，特定の人《Cl.のみ》と結びついていた先生だった。隣りに座った女の子は，父親が死亡し，母子家庭の子。市営住宅に住み，中学，高校と同じだった。その子は高校卒業後，企業を2,3受けたが，面接で父親

が不在という理由でダメだ，といわれたことを怒っていた。身体が細く，健康でない人。イトコの女の子は，自分より10歳年下の人で若く，くたびれて寝てしまった。自分だけでなく，他人にも眼なざしを向けられたタバタ先生。カーディガンを自然にかけられたのが，とってもうれしかった。))

『犬を連れた初老の傷病者』（傷ついた治療者・自己像とのめぐりあい）

夢⑮　今朝の夢。「日中だが，夕方ちょっと散歩に出る。ある道筋に，私が立っていた。すると，向うから男の人がやってきた。その人は，あらゆる面からみて，私がいいなあと思う人です。≪うれしそうに≫精悍さ，精神の深さをたたえていて，心の深さ，知性のある人，落ちついた人。犬を一匹つれている。男の人が『この犬は足が悪いので，飛びはねて歩けない。いま散歩している。』という。私は散歩していた。私が『犬のケガはひどいんですか？』と尋ねると，男の人『えー，右足が，見て下さい。』といわれ，見ると思わず顔をそむけるような生々しい傷跡をさらしていて，私は思わず顔をそむけた。足が一本ない状態で，傷口が開いている状態だ。私は，それで，道を尋ねられ，『近道があるから教えてあげます。』といいながら，『このようなすごい傷を私はみたことがなかった。生身の身体がこんな傷を負うということあるんですね』といった。そしたら，その男の人は，ズボンを脱いだ。戦場で，怪我したことは，テレビや映画でみたことはあるが，“グシャグシャにつぶれた脚”が，ホウタイや薬，バンソウコウで張りあわせてある。何とも形容できない状態であった。男の人は『ご覧のとおり，私もこうなんですよ。』といった。私は生きもののような想いで，何とも言えない状態で，それを見ていた。相手((男の人))は，誇示するでもなく，いじけるでもなく，“自然で穏やかな様子”で伝えてくれて，去っていった。」（＃53）→(((①人間というのは，正面から見えなくても，ものすごい傷というか，つらさというか，その人が中年から初老にかけて，正面から見えない部分でもって生きているのかなーと思った。その人は，落ちついた感じの，静かに，自然の姿をみせてくれていた。その姿が，非常に周りの風景とよくマッチしていて印象深かった。非常に些細な散歩中のできごとであった。田園風景だった。自分は，いまの自分の姿をしていた。②カウンセリング仲間と，話していたとき，メンバーの女の人で竹を割ったような性格の人が「自分はそういう目で他人をみてしまう」といったのとつながる。今まで自分は，自分が素敵だなと思ったら，すべて素敵と思っていたが，今後ちがうものも見ることができるかもしれないですね。③道を尋ねられ，事務的な応待でない自分。この夢の中では，もう一つ相手の中((気持))に入っている。相手が犬にかける気持を思いやっていると思う。自分の心が動いていた。))

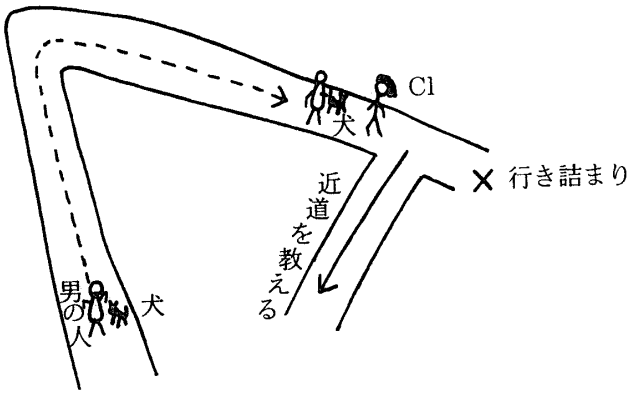

図6　＃53の夢⑮“犬を連れた初老の人”の視覚化した図（“wounded Healer”; C. G. Jung, 河合1984）

Cl.は，この夢から，今までの自分はプライドが強く，思いやりがなかったということに気づく（＃55）。

『テリブル・マザーとの遭遇』（恐い母親像への直面）

夢⑯　夢⑰に続けてみた夢。「学校のような建物の廊下。私は一人で，こちら側から向う側に向って歩いている。途中，一つの部屋の前に人影を見つける。姑だ。私は見つからないようにしたい，と思った。姑は，大きなガマガエルの姿をしており，私の方をじっと見つめて話しかけたい様子だった。私は，「今日はお話できないんです」と言いながら，つかまらないように身をかたくして通り過ぎた。

振り返ると，カエルは生母の顔をしており，この世にないような悲しい表情を浮かべて，ふり切るように歩み去ろうとする私を見ていた。私の心は悲しみでつぶれそうになった。カエルの大きな口に食べられないようにするためには必死でそこを逃がれ出なければならなかった。カエルは一定のリズムで足を動かしていた。私は同じリズムにのって，大きな声で歌をうたおうとするのだが，どうしてもこわくて，声が出なかった。歌いながら歩かないと足が進まないことになっているらしい。やっとのことで，天井スレスレのところにある小さな出口から，外へころがり出ることができた。≪うなされて，目がさめた≫」（＃56）→(((①生母を恐れていた私。生母をいい人と思っていた。しかし怖かったし，だから近づいて胸の中に入ろうとしたんでなく，怖れ呑み込まれるんじゃあないかと怖れていた。②幼少期の母との関係を，多少本から読んでいたが，この夢をみて，すごく口が大きくて，とても大きかった。小さいときから，乳呑み児を抱え，何でも食べなければ，と何でも食べていた。ムシャムシャでなく，パクパクと食べていて恐ろしかった。祖母は身体の小さい，あたりの柔かい女だった。母に，女のもつ逞しさに圧倒されそうだったことが多いかもしれない。そういう母に対するものを，夫の母にも感じ，けっきょく“母性”というようなものから，必死で逃げようとする。③生母の悲しい表情――母に寄り添ってこない子((娘))へのさみしさみたいなもの，胸の中に抱かれたという記憶がないかもしれない。自分の心の中では，反抗，反抗の積み重ねをしていたと思う。④天井スレスレを外にころがり出る――そこから逃がれ出て，強い支えてくれる“男の人”のところを求めていた。自立できている人を求めたと思う。⑤姑――午前中会う約束をしていたが，「野菜とりにこい」とかなり強引なことをいう人。⑥人間というのは，目につく，自立してないということがわかると，ぢきに醒めてしまう自分。自分を守ってくれない，とわかると逃げ出していた。私がしっかりしていれば逃げないで，生母に対してでも「なぜそんな悲しい顔をしているの？」とか「どんなこといいたいの？」といえたと思うし，そういう“力”が欲しいと思った。今度（夢を）みるとき，母の胸の中で安心

しきるのでなくては自立できないのではないか，と思う。私のような人間にとって，そこにとび込むには，ものすごい大きな抵抗がある。磁石のように +vs+ の反発が起るかもしれない。大岡信の詩を読んでいていいのは，親しい相手だから，今いわなければいけない論点は何かをはっきりしなければいけない，ということ。私には，それがなかった。この夢から，河合のいう“母性の二面性”を学んだ。))

夢⑮，⑰は，Co.にも何とも言えない痛みと怖さが感じられた。

Ⅳ期：夢による自己内探究②——治療者のCl.への直面・夫婦なるもの・癒やされる体験

この時期は，治療面接の57回目（翌年11月21日）から76回目（翌々年5月8日）までの約6カ月近くの期間である。この間にCl.は＃57～59で，夢も報告せず一時的に停滞する。そしてCo.はこのようなCl.の“躊躇した態度”やCo.への“表面的気遣い”に対して，＃59でストレートに直面する。『いままで本気に生きてきたか！』と。そして，Co.の前で涙一つも出さないCl.は感情をもっていたのか，夫をどれほど傷つけていたのか，夢⑮はどうなったのかなどぶっつけた。Cl.は身じろぎ一つしないでCo.を見据えていた。

このあと＃60から，Cl.はCo.に本気で叱られたことを自省しはじめ，再び夢のレポートを毎回のように報告しはじめる。夢のテーマは，専ら夫婦に関するものがほとんどであった。夫婦問題に積極的姿勢が出てきたCl。

この時期には，夢は25個報告された。主題に関連した夢は5個であった。

夢⑱　12/17（土）の朝の夢。「男の人2人が旅行から帰着する。男の人それぞれは，リュック・サックをそれぞれ背負っている。夫ともう一人((夫の同僚))がリュックを着けておる。みると，夫の同僚は手に包帯を巻いている。夫は『自分のはいいから，その男の人が背負っているリュックを代ってあげるように』という。」（＃60）→((この夢から，自分は夫のやさしさ，素晴らしさを痛切に感じるようになった。以前の夢((夢⑮))に出てきた男の人は，中年か初老の人だったが，あれは‘夫’だと思った。初老の生き方を，これから真剣に考えていこうと思う。))

夢㉑　1/21朝。「結婚する前に勤めていた幼稚園へ，夫婦で遊びに行った。運転手のSさんが年寄りのM先生と夫婦になっていた。私にいろんなことを話しかけてくる。彼の奥さんは，他の所に住んで働いていた。Sさんの先妻が『子どもを放っといたら，離婚させられた。本当はいつかまたもどりたい』と私に話した。『『夜と霧』を読みたい』と私がSさんに言ったら，彼（Sさん）は，奥からさがしてきてかなりいたんでいるその本を私に貸してくれると言った。私は自分で買うつもりでいたが，夫の手前，それを言えずに借りることにした。

帰るとき，彼（Sさん）は私たちを車で駅まで送ってくれた。本を私は忘れたふりをして持って来なかった。お礼を言って返さなければならないのがわずらわしかったのだ。

時間があったので，駅のそばのどこかへ入った。プールかと思ったら，スケート・センターだった。入場券を買うための行列の中で，後にいた背の高い外人の男性が私の背中へ何かのサインをおくってくる。一緒にすべりたい様子。しかもスケートに自信がありそうだった。でも私は，こんなに多勢の観衆の前ですべりたくはなかったので，いすに腰をおろした。1つの長い机に6,7人の男の人がいて，私もその中に入った。机の上の箱の中に，ゴムで出来た裸の男性の人形があって((みだらなもの，忘れてしまった。))私はそれを手にして，まわりの人と話をしながら，人形で遊んだ。今までの私だったらそういうものに興味も示さなかったろうし，さわることもなかったろうと思いながら。

さっきの男性がどうしているだろうかと思って，リングをみたらゲームの最中だった。あの人はヒーローとしてがんばりながら，どこかで私を意識しているようだった。ゲームが終ると，私たちのそばへやって来た。

そこを出て別れる時，運転手のSさんは，『夜と霧』をとり出して，「はい」と私にさし出し，私はもう逃げられないと思った。」（＃63）→((連想：前半略))((後半：自分が30才頃。しかし当時は触れてみようとしたことなかった。実際には写真やなんかでもみたことある。それなのに，この夢で，ちゅうちょなく手を出していたのが不思議で，なぜこんなのをみたのかわからない。自分は男の人の“性”に関心があるなと，自分で意識していないところがでている。それなのに私は欲しいといえない。現実には，人間にとって性って何だろうと思う。自分にとって，性というものが判っていない。実際には，男性の，男の人のそれ，身体のそれ，考えたことない。どこかで考えたくないんです。“ヒーロー”——スケートがうまい人。夫の友人46歳。自分は，子どもの方に居たが，途中，チラッとこちらを見た。“もう逃げられない”——『夜と霧』を借らざるを得なくなった自分。忘れたふりをしきれない，観念した自分に驚いたのです。((大声で笑いながら))。))

『替え玉夫婦』

夢㉓　今朝の夢。「変な夢”みたなという感じ。ブラジルで大きな運動場でもない，室内だが，商社マンとその家族，奥さん夫婦かがパーティか何かで沢山集っている。そこに私は報道関係のしごとをしているらしくて，『“あるご夫婦”の奥さんが，殺されたか誘拐されたかで，そこにいる奥さんというのは別の人“替え玉”である』という確かな情報をつかんでいる。で，そのことを確かめようと思って，ご主人とか本人とか，周りの人にかなり調査するけど，決定的な証拠というのはわからない。だけども（夫婦は）何となくそぐわない，チグハグなというのがある。その夫婦が両方ともか，片方かどっちか，それがとても奇妙な感じがしている。必らずそうであるのに，勘ではそうであるし，他に自分は証拠があるのを知っているのに話をしていて相手の尻っぽをつかめない。一体，そういうのがあるのだろうかという夢。」（＃63）→((女性報道のしごと—内偵をしに入る。まさか“組織”で働いているわけではないだろうから。本物の妻はいな

い。“替え玉”がいるけど，そうではないという決定的証拠がない。“夫婦”だとほんとうはちがうんじゃあないかと。それだけ長い時間一緒にいたら，そうでないところがあるとわかるのに，わからないというもどかしさというのがあった。当人同志そういう必要があって変装している。招待客として，“替え玉”が参加することで何らかの目的が果たされるのか，それとも一人で参加することがまずいから“替え玉”として入り，何か大きな目的があってそういうことがなされている。それをアバク≪アハハッ≫あばかなければなりません。そのペアは，“夫婦でない”のにそこのところがわからない，どういうことなんだろう。われわれぐらいの年齢だから，もう結婚して何年もいれば，もう少し“違った味”というのが，部外者にも感じられる“味”というものがにじみ出て，あるんじゃあないか。そこのところに非常にとらわれている。（ブラジルというのは？）何なのでしょうねえー≪不思議そうに≫))

『夫婦一緒に仕事に出かける』

夢㉔　2,3日前日の夢。「大きな立方体の何かがある。ものすごく，白いサイコロみたいな，大きな住家か。そこから私たち夫婦が毎日仕事に行く。

一日目は，二人で行って一緒に何か仕事をする。そのときは“自分の興味，自分のしたいことの為にだけそれをした”と思いながら帰ってきた。

二日目は，また二人で出かけて行く。そのときは“仕事そのものが面白い。いかに能率よく，いかに能率よくいかに能力を出してやろうか”ということに重きを置いて帰ってきた。

三日目は，“私がどんなことをすることで相手（夫）が喜こぶことにつながるか”ということに重きをおきながら考えつつ帰ってきた夢」。（#63）→((一緒に何かをやるとき，色んなやり方がある。一，二日目は，とても高揚したという気持。三日目のは納得したという気持で帰ってきた。相手は納得したかどうかわからない。（三日目のありようはあまり意識してなかったのでしょうか？）私には努力しなければできない。私は努力をどこかで放棄していた。あの人（夫）は，ほんの些細なことをしてあげることで，喜こぶ人だが，そこのところを手を抜いていた。（すごいことをご主人にしてしまっているのかもしれませんね。一寸したことで喜こぶ主人に配慮することでそんなになるというのに。）だからそこら辺のところ，自分の問題だと思う。結婚生活がうまくやっていけないというのは，他のどこでもできない。（他のどこでもやっているかもしれない。子どもさんにも，他の人にも，ココでもやっているかもしれない。）自分で気づかなかった欠点，どうしようもないということですね。――しばらく沈黙のあと――（それがね，知識として頭からでなく，腹の底から判ったら，もう感じられるのかしら，どうですかねー，本当に腹の底からそうだったら，ものすごい変化があるのにねー！）

だからもう一年いいから，できるかどうかわからないんだが，あの人（夫）の心というもの感じとるようにして，そこが喜こぶような生活をしてみようと思う。“思いやり”がなかった。“思いやる”というのは，自然にできる人とちがって，“努力しなくてはできない”ので

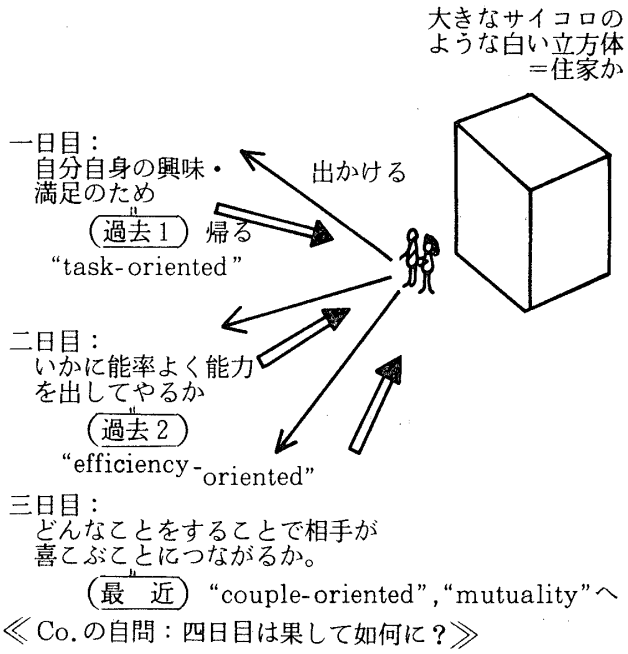

図7　#64の夢㉔の視覚化した図

しょうね。他の何するより，そこかなーと思う。他の方が楽なんだけど。（親一子の生活，夫婦の生活をしている限り，相手より，こっちが響き合いをしないで作っているのかもしれませんね。））))

（　）内：Co.の発言

#64の＜印象＞

‘3つの夢’を語りながら，最後に帰りぎわに「一緒に何かするとき，いかに相手の気持なんかを無視していたかということを思います」「全然無視していたことに気づきます」と言ったことに，Co.は身の毛がよだつ思いがしたのを覚える。自分が自分が，といっていたCl.が，ようやく相手（夫）の喜こぶ自分への兆をみせてきた感じ。Cl.のしたたかさはまだ続く見込みである。

夢㉖「大きな真四角のダンボールがある。古ぼけて今にもこわれてしまいそう。やっと形を保っている。中にはあふれそうにいろんな物がつまっている。私はもう一人の誰かと一緒に，その1つ1つをとり出す作業を始めた。それらは茶色の袋に入った絵画だったり，レコードだったり，楽譜だったりした。折れ曲がったり，ゆがんだりしているのをとり出して私はていねいに，しわを伸ばしたり，汚れた袋からとりはずしたりした。一ケ所に雑然と押し込められていたそれらの物が，再び生きかえることを，私は，とてもうれしいと思った。」（#66）→((はじめはこれはきれいで好きな夢だと思った。しかし来談する途中そうでないと思い始めた。音楽，美術を感じる心は，その人の性と関係がある。自分は，好意をもってくれる人の心がわからなかった。私の中に権威，金，地位を求めるガードの枠があった。性が満たされているということに無関係ではないのではないか。満たされている人の場合には，感じがいい音楽，絵画になる。もう一人の誰か？――タバタ先生らしい人。とり出す作業――カウンセリングや夢分析のこと。≪以下略≫))

夢㉜「家の部屋よりもう一寸大きい部屋に《小，中学生風の》子どもが5,6人立って何かしている。そこに“男の大人”の人がやはり立っていて，子どもたちに注目しながら黙って立っている。そしてもうひとり2,3歳の女の子，たぶん自分と思われる幼児が入口から入った右手の壁に手をかけてその人たちを見ている。自分は，あーこれが“やさしさ”，“育み”というものだと思った。」(#68)→《自分はそのおとなの人はタバタ先生かと思った。他の5,6人の中にいる自分が2,3歳の幼児でいるのが不思議だ。でも“愛情”，“見守られて何かを自由にやる”ということはそういうものか，と思った。≪以下略≫》

夢㉝「旅館か料理屋の一室。私はそこに一人で居る。まもなくたくさんの人々がくることになっている。私の血液が一滴，白壁にとんで，みるみる上方に広がっていく。別のところにもう一滴とんで，さらに大きな場所に広がる。私は，とめる方法が分らないまま，よその家を汚してしまったことと，他の人々が気持悪く思うのではないかということでハラハラしている。

そこへ女性が二人入って来た。彼女たちは，私の説明を聞くと万事心得ているという顔つきで，壁についていた血液をふきとったりけずりとったりして助けてくれた。」(#69)→《血は自分のどこから出たものかわからない。血は新幹線の窓に雨がしたたるように広がっていった。どうして血がとめられるか不思議にわからない。とめたいけどとめられずハラハラしている。女性は？――夢の中では現実に知っていた人だが忘れた。もう一人の女性は最近は会っていない女性。しかし信頼のおける人。血はきれいにしまつされて安心した。》

V期：夢による自己内探究③――湖中ホテルの従業員を止める・治療終結の予告・再生・現実課題に向けて出発

この時期は，治療面接の77回目（翌々年5月15日）から現在（84回目）継続中までの時期である。Cl.はⅣ期まで続けてきた自己の深淵への旅をし，従業員として働いていることをやめる夢など，そろそろ自己内界の探究に一節目をつけようとしてきている感じの夢が多くなる。そして現実課題――ある施設のボランティア・グループ・カウンセラーに推薦されるなどして，家族メンバーにも賛意を得て，そちらにも精力を注ぐようになる。治療面接は今後も続けていく約束になっている。

この時期に報告された夢は8個である。そのうち治療者像の夢は3個である。

夢㊸ ≪朝目覚めたとき覚えている夢≫。「北海道の支笏湖（又は洞爺湖）の湖水のまん中に建てられているホテル。私はそこで従業員の一人として働いている。ある日夫の友だちのXさんが弟分を1人つれてやって来て，仲間に加わった。何か月，あるいは何年かの間，そこでみんなで働いた。いろんな人が訪れてきて，いろんなことがあった。

私がそこを去ろうという日の前夜，仲間たちはパーティを開いてくれた。1人ずつ立ち上ってスピーチをしている。Xさんの番になった。彼ははじめてそこを訪れた日のことを，次のような口調で話しはじめた。『このホテルは“幻のホテル”と呼ばれていたので，探し出してたどり着くまでが大変だと覚悟してきた。ホテルは湖のほぼ中央にあるが，ふだんは霧にかくれて見えにくいという。やっと見えても海抜2,000 mの氷の上に建てられているので，滑らないように注意しながら登りつめなければならない，と聞いてきた。そのための時間を見越して，装備も充分整えてきたつもりだ。ところが実際に来てみると，ホテルは手の届くようなところにあった。』と。

パーティの終る頃，私はホテルの社長らしき男のところへ挨拶をするために歩いていった。相手は，大きな身体をしていて，雲でできた座ブトンの上にダルマのようにあぐらをかいて座っていた。うでを組み右手でほおを支えて，あごを左右にゆっくりゆっくり動かしていた。

私は『長いあいだお世話になりました』と言い，続けて『さようなら』といおうとして，ちょっとつっかえてしまった。男は，今までいつもそうであったように，めがねの奥からじっと私を見ていた。何も言わなかった。この人は，私の要求をそのまま受け入れてくれた人なので私は別れることが悲しかった。

翌朝，ホテルを出て，湖の岸に立ってみたら，水は雨のあとのように濁っていた。軽いナップザックを肩にかけて，私は右手に向って歩き始めた。」(#77)→《湖のまん中の幻のホテルがあり，そこを離れるというのがおもしろかった。従業員として一所懸命やっていた。Xさん――すごくやさしい人。どちらかというとうだつが上らない人，人生のいろいろな節目で絶えずダメで遅れ遅れになっていっていったが，どうしようもなく人がいい。社長らしき男――年齢は40代の終り頃，わりに若くみえ，メガネをかけている。≪治療者イメージ≫，≪父イメージ≫，≪ある男性イメージ≫。この男の人は，前から話していた男の人と思っていた。幻のホテルとか雲の上とか，まぼろしとして自分の心のまん中に占めていた。満たされないあるものを代償にその人に求めようとしていた。しかし「サヨウナラ」ときっぱりと言えず，詰まってしまった。

以前（#42の夢⑧）の重いリュックサックと比べて，軽いナップザックであった。濁っていた――まさに澄んでいるのでなく，ドロドロでもなく，雨のあとのようで，下に泥が落ちてなく，透明ではなかった。》

なおCl.は#78で，前回の夢で「社長風の人が左右に首をふる」ということから，「首ふり人形」をデパートでみて，母の病床中に「ピンクのマリを作ろう」と思い立ち，下手ながら作ろうとしていたこと，自分に“少女らしさ”（＝やさしさ）があることを思い出したという。Co.も心地よく聞けた。

夢㊼ ≪カウンセリングを知らない頃，昔学生時代の頃みた夢≫「何かどうしようもない夢。まわりのみんなにいじわるをする夢。そうしたときに感じた自分はどうしようもなく不安になる。

ある時，“男の人”が来ていう。『何でもボクに話してご

らんなさい。』―誰にもいえない，涙にひたるほど泣いていたかもしれない自分。『それによって心が軽くなるでしょう。』―話すことによって心が軽くなること。『その代り高いお金をもってきなさい。』―自分はそれがものすごい額で，とても自分には支払えないと思った。夢の中では，男の人はイメージとして“中国の仙人のような古老”だった。」（#81）→

《自分は小さい頃から，童話や昔話で風，空気などでも何を話してもわかってもらえる人を求めていた。わかってくれる相手が欲しいと思っていた。もっと大きくなって，中学生になってこの世の中，日本の中に私と同じように育っている人で，いつかきっと私の心のことを知ってくれる人がいるのではないか，その人はどこかにいて春から夏にかけての季節の変化を知っていて，どこか社会の片隅にいる人を知っている，そういうことをパッパッと思っていた。

いまここにきて面接をうけていることは，自分が一番欲しいと思っていたことではないか。カウンセリングとか，自分を知りたいとか，深めたいというのではなく，心でここに来たい。わかってほしい，と怒っていた。生まれて死ぬまで，“自然に居れる自分”になりたい。つくるのでなく，“自然に存在したい”。

この思い出した夢は，ほんとうに自分にかかわるという全身で心にみた夢という感じ。心のこと，こんなすごいこと，お金を代償にしてでも救われるんだな，“希望”ってもてるんだなと実感した。以前はお金がかかることかな，と思っていたこともあった。世の中は，絶望だけではないんだなー，と思った。》

夢㊿「私が深い深い眠りから覚めた場所，それはKo先生の研究室だった。Ko先生と向い合う位置に田畑先生がいて，横に主人が腰かけていた。私は田畑先生がすわっているイスのとなりにふとんをしいて熟睡していたものらしい。いい気持だった。田畑先生と主人と私がKo先生の部屋で話し合っている，ということは，カウンセリングの過程でこういうことが必要になったということかな，と私は思った。3人はなごやかに話し合いを続けている。

私は起きようとするのだが，眠くて体がいうことをきかない。しばらくしてからようやく起き上ることができた。寝起きの顔を見られたくなかったので，かけぶとんを2つに折りたたんでから，後向きにずっていって田畑先生の背中に軽く寄りかかった。“今起きた”ということと“こんな所で寝ていてはずかしかった”という気持を伝えたかったのだ。先生は，右手で左肩越しにトントンと私の肩をたたいた。それは『いいんですよ。分っていますよ。』と言っているように思われた。《以下略》。」（#83）→《全体の印象はとても気持がよかった。自分は深く深く眠っていた。最近は昼も，午後も，夜もよく深く眠れる。≪Co.：寝る子（娘）は育つといいますね。≫ 今起きた―昔こういう場面があったのではないか。家族以外のときあった。幼少期，祖母の家にいたとき，近所の人がきて，お茶やお菓子をいただいて，まわりにすぐ溶け込むことができた。寝ていて起きたということを許されたこと思い出す。そういう場は，父の家庭にはなかった。兄弟が多かったこともあるが，いつも緊張していた。いいんですよ分っていますよ――いい気持だった。中学・高校のときに思うと，私が安心できる，希望をもてるものは，遥か向うにあって手が届かなかった。いまこの場で，話せる相手，甘えてみよう，泣いてみようという気持，やってみようと思ってもよくわからない。》

Ⅲ 考　察

ここでは，本稿の目的にそって，まず目的1と2を，そしてつぎに目的3をそれぞれ考察する。

§1 夢に現れた変形した治療者像とその機能の変遷

事例Aは表2に，**事例B**は表3にそれぞれ示した。

これらの一覧表に，前報（田畑，1983）で分類された治療者の機能分類（表1）を充てはめて，それぞれ各表の右端に記号化した。一覧表でわかるように，事例Aは全部分類化できた。また事例BもⅣ期の夢⑱が若干分類に困難があったが，Aとして一応分類しえた。

つぎに，各事例ごとの，各段階での特徴的な治療者機能をみてみよう。

事例Aでは，Ⅰ期からⅢ期にかけてD（力・迫力あるものとしての機能）が最も多い。この時期は，Cl.が極度の自己否定，自責の念にかられ，また自己の“影”におののいていたことが考えられる。治療者に，女々しく涙することに活を入れられたり，大学再受験という進路変更に戸惑っているとき，厳しく直面され，Cl.はたじたじであったことが伺われる。このCl.にとって，基本的に受容的，共体験的態度であることが治療者に意識の上で自覚されていたものの，反面で治療者が表現していたストレートな感情の伝達に，Cl.は心理内界の奥深くでは，圧迫感や脅威感にさいなまれていたことが伺われる。しかしGやCも伺われ，いつも力・迫力あるものと

表1 愛氏（男性，32歳）の夢にみられた治療者の機能分類（田畑，1983，P.110）

記号	治療者の機能分類
A.	苦悩・痛みの身代り，犠牲者としての機能
B.	安心感，救助を与えるものとしての機能
C.	訓導，案内をするものとしての機能
D.	力・迫力あるものとしての機能
E.	処遇・施術したりするものとしての機能
F.	共存者・協同者としての機能
G.	“世間知”に長けた人としての機能
H.	魂・宗教的なものをもつものとしての機能
I.	見知らぬ人としての機能

表2　竹元三男の夢における登場人物像，行為および機能分類

夢No.	変形した治療者像	行　　為	機能分類
	Ⅰ期－1個		
No.5	ダ　ン　プ	（クライエントの車をふさぎに）出てくる。	D
	Ⅱ期－1個		
10	健康的で仕事もてきぱきやる人	『まだ処理しかねているのか！』と大きい声で言った。	G
	Ⅲ期－2個		
13	中年の女性	教壇にいて，（クライエントの）質問をうける。	C
	黒っぽい服装でやくざ風の男の人	降りようとするクライエントを巻き添えで落とす。	D
14	誰か侵人者・海賊風	実家の部屋にいるクライエントのところに侵入してくる。制止をきかず『ちゃんと侵入の目的はある』という。	D又はI
	Ⅳ期－4個		
16	戦車のような重いもの	東の方から（クライエントの家の庭の土手の方に）進んでくる。敵・味方でいえば味方。	B
22	タバタ先生	エンカウンター・グループでクライエントに退屈し，横になる。	B(D)
28	女　院　長	「午前中で（治療は）終了したので治療できない」と告げる。	E
29	婦人警官	ゆるい登り坂を登り切ったところにいて，「右の方へ廻れ」と合図している。	C
	Ⅴ期－5個		
30	誰か作業する人	深く堀り込まれた装置の中の事故の水と泥を汲み出している。	F
32	別の友達（進行責任者）	途中まで済ましている中断作業に「心配だから残りをやってほしい」とか「場所の予約をしておこうか」と親切に言ってくれる。	F
33	父（タバタ先生）	先頭になって狭い階段を電池で照らしながら進んでいく。	C
34	誰か男の人	鉱山の採堀場に調査のために（クライエントとともに）来ている。	F
37	靴修理コーナーの担当の人（タバタ先生）	クライエントの名札を一緒に探すが見当らないので，「自分で作れ」という。	E(D)
	Ⅵ期－2個		
41	体育の先生らしき人（神様かタバタ先生）	垂直のロープを支え，クライエントはそれを頼りに階段を降りる。	B又はH
43	マチの人々	上から別れを惜しんでパラパラと水をかけてくれる。	H

しての治療者機能を発揮していたわけではない。この点については，筆者が別稿（1984）で論じたように，心理治療における“父性機能”は，“母性機能”を前提として発揮されなければならないといえよう。Cl.の特質や性格特徴，さらには自我強度や精神病理像とを勘案して，“父性機能”は慎重に発揮されなければならないものであることがわかる。

Ⅳ期では，Bが現われている。“戦車のような重いもの”が援軍にかけつけ，味方と感じることでCl.は安心している（夢⑯）。またエンカウンター・グループの“ファシリテーター”として，治療者がもろに現われている。しかしこのファシリテーターはCl.に退屈をし，横たわり，少々Dの要素を示している。（この点，事例Bの夢⑭に出現するファシリテーターと対照的である。）またこの時期にEやCが現われ，登場人物がいずれも“女性”であるところが印象深い。Cl.は，現実生活では家庭での妻，職場や大学での女性に脅やかされ，ぎこちなくなっていたことからすると，心理内界での女性接近が相当

表3　西空あかねの夢における登場人物像，行為および機能分類

夢No.	変形した治療者像	行　　為	機能分類
	Ⅱ期―1個		
No.3	日本で有名なテニスの選手	白い丸い硬球をラケットの中央に当てものすごい強いストレーのサーブを入れる。	F
	Ⅲ期―5個		
6	誰か（男の人）	叔父を殺すため，（クライエントと2人で）同行する。	F
8	リュックを背負った同行者	クライエントと共に湖面に旅し，クライエントの話を5つに分類する。	F
10	Tくん（タバタ先生）	中学時代のライバル， これから観る映画の説明をクライエントから受ける。クライエントと手をつなぐ。	F
14	タバタ先生	宿直室でエンカウンター・グループのファシリテーターをやり，メンバーにまんべんなく“暖かい眼なざし”を向けている。	B
15	ケガをした犬を連れた初老の傷病者	クライエントに道を尋ね，犬のケガや自分の生々しい傷をみせて，そのあと静かに去っていった。	G(A)
	Ⅳ期―5個		
18	男の人（夫の同僚）	旅行から帰着する。手に包帯を巻いている。	A′
21	背の高い外人の男性	スケートをクライエントと一緒に滑りたい様子。スケートに自信がある。	F
26	もう一人誰か（男の人はタバタ先生）	古ぼけたダンボールの中のものを一緒にとり出す作業をする。	F
32	男の大人（タバタ先生）	小，中学生風の子ども5,6人に注目しながら黙って立っている。2,3歳の女の子（クライエント）がそれをみている。	B
33	女　　性	出血したクライエントの汚した血液をふきとったり，壁をけずりとったりして助ける。	B(E)
	Ⅴ期―3個		
43	ホテルの社長らしき男	クライエントが従業員辞職のあいさつに行くと，雲でできた座ブトンの上にダルマのようにあぐらをかいて座っていた。めがねの奥からじっとクライエントを見ていた。	G
47	≪昔の夢≫男の人＝中国の仙人のような古老	「何でもボクに話してごらんなさい。」「それによって心が軽くなるでしょう。」「その代り高いお金をもってきなさい。」	G又はH
50	タバタ先生	Ko先生の研究室に主人と3人でいる。熟睡していた自分は，タバタ先生の背中に軽く寄りかかる。先生は右手で左肩越しにトントンとクライエントの肩をたたいた。	B

可能になってきていることを示しているし，治療者の“女性性”と親和的になってきていることを示していると考えられる。

Ⅴ期になるとFが3個も出てくる。これらは，治療者にとっても，とても印象深い，感動的な夢であった。まさにCl.は心の深淵で“喪失した父”と出会っている。その発掘作業をする協同者が，他でもない治療者であった。また機能分類は異るがCでは“父”が先頭になって狭い階段を電燈で照らしながら進んでいくのである。治療者はこれらの夢（㉚，㉝）に霊的，宗教的な共体験をしつつ聴いている思いがしていた。もう一つの夢㊲では，靴修理担当人として治療者が登場している。これはEと分類されたが，多分にDの要素も含み，夢の中でCl.に「自分で作れ」と突き放しているところが印象深い。

Ⅵ期は，B（またはH）とHの2個であった。これらの治療者像は，安心感や救いを与えるものであるが，多分に宗教的，儀式的要素，お別れの儀式あるいは終結の予告夢（鑪，1983）を同時にはらんでいる。

以上，事例Aの各段階ごとの機能分類をみてきたが，特徴的なのは，Ⅰ～Ⅲ期はDが主要な機能であり，Ⅳ期

ではBが半数を占め，EとCの場合でも“女性”が登場し，またV期ではFが主な機能を示し，父が登場している。Ⅵ期ではBまたはHであり，宗教的儀式的である。

つぎに**事例B**では，Ⅱ期からⅢ期ではFが最も多くの出現（テニス選手，叔父殺しの同行者，湖面への旅の同行者および中学時代のライバル）である。残りはBとG（A′）である。つまり治療者の実像が登場し，暖かい眼なざしを向ける。また“傷ついた身体”を淡々と見せて去っていく初老の人もいる。このあたり女性Cl.に特有な恐怖や自らの傷心を癒やす相手としての治療者への，依存・甘え・性愛を映し出していると考えられ，先の事例Aとは好対照をなしていることがわかる。

Ⅳ期でも，やはりFとBが各2個で多く，残りは“手に包帯をしている旅帰りの夫の同僚”（A′）である。ここでも，やはり同行者（同僚）と旅（共同作業）をしていることが伺われる。またBのように，安定感や救助を与える大人や女性が登場している。この時期でも“傷心”のCl.の依存対象に，治療者が変形して現れていることが伺える。

V期では，Gが2個，Bが1個出現している。Cl.の受容対象・依存対象になった治療者像が，“幻想的なスタイル”で，じっとCl.をみつめたりする中年の社長，あるいは中国の“老賢人”として現れている。そしてもう一人は，依存し，安心の対象となる現実の治療者像として現われている。

このようにみてくると，事例Bの各段階ごとの機能分類の特徴は，Ⅱ～Ⅲ期ではFが主で，他にBとG（A′）Ⅳ期ではFとB，V期ではGとBがみられ，基本的には依存対象，性愛対象としての治療者像が伺われる。またV期では，どこか幻想的な男性や中国の老賢人といった霊的，宗教的な雰囲気さえ漂わせる治療者像が映し出されていることもわかる。

以上，事例A，事例Bごとに，各段階に添って，機能分類をしてきたことによって，本研究の主要目的の一つであった治療者と同年輩の男性，女性のクライエント（同一性障害群）の場合でも，先の分類カテゴリーの客観性はあり，かかる観点での検討に際し，妥当であり，かつ有効であることが結論づけられた。

しかし，男性クライエント（事例A）と女性クライエント（事例B）では，上でみてきたように治療者像やその機能の変遷の様態はかなり異ることも判明した。すなわち男性クライエントでは，初期（Ⅰ～Ⅲ期）はDが主要な機能であり，中期（Ⅳ～V期）ではBが半数を占め，その他はEやCであるが“女性”が登場人物であり，またV期ではFが多く，終期（Ⅵ期）ではBとHが多いことが判った。これに対し，女性クライエントでは初期（Ⅱ～Ⅲ期）でFが，中期（Ⅳ期）ではFとBが，そして終期（V期）ではGとBがみられ依存対象，性愛対象としての治療者像が浮き彫りになった。

しかし，これらの同性間，異性間の治療者機能の変遷の差異が，治療期間の長・短によるものなのか，男性ないし女性に特有のものであるかどうかについては，今後，もっと若年の思春期・青年期事例，または老年期事例について夢分析を通して検討しなければならないと考えられる。

§2　本事例2例の治療関係と治療効果について

最後に，本研究で用いた2事例の治療関係と治療効果について，総合的に評価してみよう。考察に用いたのは各時期ごとに表明されたクライエントの自己像の夢を中心にする。

事例Aでは心理治療過程は全部でⅠ～Ⅵ期に分けられた。

Ⅰ期は「前進不能」（#5，夢①），「クロールで水がかけない，平泳ぎならスムーズ」（#9，夢④），「黒い人影に脅え，車の中へ逃げ込む」（#17，夢⑥）「男の人が近づいてきて，目の前でバッタリ倒れる」（#17，夢⑦）に現われているように，まさに自我同一性が混乱し，モラトリアムを希求している自己像であり，かつまた自己内界の“影”に脅えきっている状態であった。

Ⅱ期は会社をやめて，人のためになる医師に転身しようとする。大学受験に一度失敗するが，定まらない自分を訴える。Co.に叱咤激励され，ストレートに直面されていく。「真夜中の錠修理を気にするが，妻に『いい』と励まされる」（#47，夢⑨）ことに示されているようにビクビクしながら，大学受験に再挑戦し美事に医学部合格を果たすことができ，これからは自由の身であること，人間的な接触ができることを喜こぶCl.であった。

Ⅲ期は，クライエントが永年勤めた会社を敗北宣言して退社し，中年学生として再び学生々活を送るようになる時期である。「見知らぬ男の人を取り押えて刺す」（#88，夢⑪クライエントの“影”との対決の夢），「面なしで剣道の練習をする」（#88，夢⑫）。しかし，大学の学友との間にやはり対人関係の障害（中年女性学生とのアンビバレンス）を示す。「心に燈をつける。フロ炊きをするが，種火がうまくつかない」（#90，夢⑮）ので悩む。しかし次第に自分の中に欠如している“腕白さ”，“父親への反抗心”を自覚するようになる。

Ⅳ期は，夢分析が本格化する時期である。「学芸会に招かれる。学校のぬかるみ道を通っていくとき，“暴れ牛”を制止する人に求められる。//海の中の審査員に加わるが，席がなく（他の審査員の円座の）外側に座る」

（#94，夢⑰）。「バイクで行ったり来たりしているうちに刀を乗せた荷台を失う」（#94，夢⑱）まだまだへっぴり腰で，右往左往し，消極的なクライエント像である。しかし反面で「自分のいうことをきかない妻を蹴っとばす。すると妻が自分を殺しにくる」（#96，夢⑲），「鯉つりに行って得体の知れぬ虫《歯をムキ出している》を握む」（#102，夢㉕），「ゲリラがピストルで向い合っている」（#103，夢㉖）のように攻撃感情を表出してきてもいる。総じて，自己像は「弱いヒヨコを掌にのせる」（#99，夢㉔）であり，「体力が落ちている自分」（#104，夢㉗）である。

Ⅴ期は，クライエントは暗い深淵で“母や父と邂逅”する（#109，#110）。そして「薄明るい道路で，誰か男の人と顔を見合わせてニッコリ会釈する」（#114，夢㉟），「彼女を左手で釣る《永遠の女性＝Zさんへの未練》」（同）を表明する。また#111で，口頭により，「近頃の自分は，自己否定的でなくなっている」と語っている。また夢の中の風景も，暗闇やうす暗いものから，明るい，昼間のものが増してくるようになった，とCl.も感想を述べる。

Ⅵ期は最終段階である。この時期に，Cl.は“女性攻撃（ないし女性殺し）”と自分の“影”との対決をなしとげる。「太った女の人と一緒に白い女性をグランドに追い込み，投石する。その白い女性にうらめしそうな顔でにらまれている」（#117，夢㊳），「《日本列島縦断中に》トンネルの中で目付きの鋭い大きい顔の男の人と出くわし，ハンマーで応戦し，トンネルの出口で絶対安全を確信する」（#123，夢㊸），「夜間に立小便をする。男の人が近づいてきて自分はよける」（#126，夢㊺）「郷里の庭で闘犬二匹を闘わせる」（#126，夢㊻）などにみられる逞しい“男性性”を発揮する夢を伝えている。また現実の自己課題にとり組んでいる夢「解剖実習に一心不乱」（#125，夢㊹）も報告している。こうして，#127（最終回）で，Cl.は近況を語り，自らの決意で終結の申し出をして治療者のもとを去っていった。

以上のように，本事例Aの各段階ごとのCl.の夢に現われた自己像の変遷からわかるように，Cl.は初期の“影”に脅えていたところから，“影”と対決し，闘える男性性を発揮していけるようになってきたこと，またⅤ期に“喪失体験”を深淵の中で再体験し，両親と邂逅できたこと，また自己肯定的に感じられるようになったことから，援助目標に照らして治療効果は十分あったと判定することができると考えられる。今後は，Cl.自らが現実生活の中で，足がけ4年間の治療者との人間関係を媒介にして体験したことを生かしていくべきであろう。

つぎに**事例B**の治療関係と治療効果を考察する。この事例では，心理治療過程は全部でⅠ～Ⅴ期に分けられた。

Ⅰ期は，まだ夢が報告されていなく，クライエントは言語的に，自己像を表明していた。空襲を避けるため，田舎に疎開させられ，祖母のもとでのさまざまな記憶をCl.自ら思い起こしては伝えていた。“隠ぺい記憶”（screen memory; Freud, S.）がいくつか走馬燈のように浮かんでくるという。すなわち「両親に見捨てられた自分」「両親に抱っこされたことのなかった自分」「西空に沈む夕日のあかね色に，いつも“悲しさ”を覚えていた自分」「小3年頃まで“指しゃぶり”をしていた自分」「高校時代に一応“非行”という名のつくものは一通りやった」「自殺未遂もやった」など，過去からその後現在まで楽しかったり，充実したりしたという記憶や体験は，一切ないかのようである。

Ⅱ期は，本格的にカウンセリングが開始され，Cl.は次第に非自己（non-self）から自己（self）そのものへ求心的に目を向けるようになっていく。このような過程で“イニシャル・ドリーム”が報告される。すなわち「乳呑み児がいる。それをめぐって父，後妻，自分がいる」（#22，夢①）を見る。これは，まさに“父親への嫉妬”（小此木，1984）である。またひきつづいて「性的いたずらの初体験」（#33，夢②）として，幼児期記憶が再生される。そして，このCl.における両親との愛・憎の葛藤および性をめぐる混乱の芽が一通り出揃うことになる。

Ⅲ期は夢分析が本格的に進んでいく。Cl.は治療関係に支えられていよいよ夢をレポート用紙に記してくるようになる。自己像に関するものとして「象（の鼻）を咬る（→歯を治療した後に強くなった自分）」（#44，夢⑨），「父―娘の葛藤，それを見る夫の目《繰り返えし夢》」（#50，夢⑫）を報告する。さらに劇的な夢「犬を連れた傷ついている男の人との出会い（グシャグシャにつぶれた脚を見せられるが，これは傷ついた治療者像でもあり，かつ自己像でもあると考えられる（河合，1984）。」（#53，夢⑮），「子どもの気持を無視して怒る自分」（#56，夢⑯），そして「テリブル・マザー（ガマガエル）の出現に必死で逃げ出す」（#56，夢⑰）などが伝えられる。ここでCl.の自己像の否定的混乱状況が伺える。

Ⅳ期では創作詩『故郷喪失者』（#58）を持参し，過去を背負いながらも確かに一歩一歩進むしかない自分を謳う。そして“理想化した男性”を求めているところから次第に遠のき「夫と夫の同僚が旅行から帰着する」（#60，夢⑱）を表明する。そしてこの夢から初老の夫婦の生き方を真剣に考えていこうと思うことを述べる。そしてこれまで“性行為”の場合も自分が“無”になるものと思っていたのが，“有”になり，相互主体的であること（#61，

夢⑲）を伝達する。そして夫婦というものを積極的に探究していく（#63，夢㉑；#64，夢㉒，㉓；㉔；#69，夢㉞；#72，夢㊳；#76，夢㊷）などであった。

しかし反面で「旅館かホテルに大勢で泊っていると，2才位の男の子がウンチをしてオムツを汚している。私はていねいに洗った。そばへ3才位の女の子がきて，やはり洗ってもらいたそうにしていた」（#63，夢⑳），「（大人の人が小，中学生風の子ども5，6人たちを注目しながら黙って立っている。）もうひとり2～3歳の女の子，多分自分と思われる幼児が入口から入った右手の壁に手をかけてその人たちをみている」（#68，夢㉜），「母のところに自分と他に男の子が2人いる《くつろいで安心しておれる》」（#70，夢㊱）「昔の家にいて，父はひとりで足が不自由。タンスに手をかけると病床の母の顔が浮かび，無性に会いたくなり，思い切り甘えたいと思った」（#72，夢㊴）などにみられるように自己像は幼児像で愛情や身体接触を希求していることがわかる。また「箱の中からポーンと外に飛び出し，（自分は）外に出る。すると身につけていたカプセルのようなものがはがれ落ちる。……。裸の自分，子どもはうぶ毛の生えている，危なっかしいヒナのようであった。」（#71，夢㊲）のように自己脱皮するが脆弱である。

また「家族で旅行に行き旅館にいる。ひとりで部屋にいると，カバンの中からゴキブリがでてくる。清潔にしなければいけないと思い，スーツ・ケースの中のものをとりに行くが，そのケースの中が空っぽであった」（#73，夢㊵）でもある自己像である。

このようにこの時期は，夫婦関係のあり方を多面的に探究するが，自己像はまだまだ幼児像であり，盛んに愛情や身体接触を求めている。子育てにおいても一皮脱皮するが“裸”であるし，スーツ・ケースの中は空っぽである。

V期はCl.がある訣別を告げて，現実課題にとり組みはじめる。夢の中の自己像は「作業服から外出用の身仕度をしはじめる」（#80，夢㊺）がそれを物語っている。しかし「病院長の娘である自分たち夫婦の仲はよくない。私は荒々しく，がさつな態度で生活していて不幸である。夫は医師であるがいつもイライラしている。夫婦の間に1歳位の赤ちゃんがいるが，やせて神経質で，みじめな声を出して泣いていることが多い。……。夫は医師から歌手に転向し，性がうまくいくようになる。」（#76，夢㊷）のように夫婦関係ではまだ不幸な自己像である。しかしこの時期の最も象徴的な自己像の夢は，#81の夢㊺であり㊻である。夢㊺「自分の誕生の通知をある人《男性》に出した。礼状に『きっと美しく成長するであろう』という意味のていねいなことばが3度くりかえして書かれている。」，夢㊻「私たちは友だちと一緒にいる。仲間の一人が一枚の写真をみせて『私なんか生まれたときに両親が美しさを競うベビー・コンクールに出て優勝したのよ。これがその写真』という。写真にはピンクのあざやかな目を見はるような色のロンパースをはいた女の赤ちゃんが写っていたが，顔は浅黒くてませて緊張していた。それはアンバランスであった。……。その赤ん坊が私であり，その顔が私であることを私は知っていた。」であった。

Cl.は夢㊺にみられるように現実課題に踏み出したが，この夢㊺㊻にみられるように，まだまだ“幼く，愛情を希求”し，自己内界は未統合であり，今後夢分析の旅路を歩み続けなければならないであろうことが，これらの夢から示唆されている。

以上のように，本事例Bの各段階ごとのCl.の自己表現や夢に現れた自己像の変遷からわかるように，自己像はまだ未成熟で依存的求愛的な幼児的段階にとどまっており，夫婦関係における自己もまだ十分な相互性に到達していないし，子育てにおいても一段と自己脱皮しているがまだ裸である段階である。Cl.は現実課題（ボランティア活動）に目を向け始め，心理療法に終結の予告をしつつあるが，治療効果は援助目標との関連でまだ不十分であると判定できる。これは事例Aが4年間の心理療法の期間であったのに対し，本事例Bではまだ2年余りの心理療法の期間しか経ていず，今後とも自己の性同一性獲得に向けての作業は続けられなければならないと考えられる。

Ⅳ　要　　約

心理治療過程において援助者である治療者を，クライエントはどのように感じたり，知覚しているのであろうか。本研究では，心理治療過程で扱われた夢の分析を通して，そこで映し出されたり，浮かび上ってきた治療者像をとりあげることにする。具体的には，以下の目的である。

1. 母性喪失体験をもつ，治療者と同年の男性・女性のクライエントの夢分析を通して，そこに映し出されたり，浮かび上ってきたと思われる治療者像を，各治療段階ごとに治療者の行為および機能の変遷について明らかにすること。

2. その際，先の報告（田畑，1983）で分類された治療者の機能分類カテゴリーを用い，その客観性や有効性を再吟味すること。

3. そしてこれらのクライエントの治療関係ならびに治療効果を，夢に現れた自己像との関連で評価すること。

本研究に用いたクライエントは，事例Aは40歳で既婚男性であった。治療（夢分析）は4年余りで終結した。また事例Bは41歳の既婚女性で，治療（夢分析）は2年余りでその後も治療継続した。両事例とも同一性障害をもっている神経症圏内のクライエントであった。

結果は，つぎのようであった。

1. 事例Aでは，全部で46個の夢が報告され，そのうち治療者像に関連する夢は，Ⅰ期1個，Ⅱ期1個，Ⅲ期2個，Ⅳ期4個，Ⅴ期5個，そしてⅥ期2個であり，全体に占める割合は32.6％であった。事例Bでは，全部で50個の夢が報告され，そのうち治療者像に関連する夢は，Ⅰ期なし，Ⅱ期1個，Ⅲ期5個，Ⅳ期5個，Ⅴ期3個であり，全体に占める割合は28.0％であった。

2. 治療者像とその機能の変遷に関しては，事例AではⅠ期からⅢ期はD（力・迫力機能）が主要であり，Ⅳ期ではB（安心感，救助機能）が半数を占め，E（処遇・施術機能）とC（訓導・案内機能）でも“女性像”であり，Ⅳ期ではF（共存者・協同者の機能）であり“父親”が登場し，さらにⅤ期ではBまたはH（魂・宗教的な機能）であった。これに対し事例Bでは，Ⅱ期からⅢ期はFが主要機能を示し，G（世間知に長けた人の機能）（+A′）もみられ，Ⅳ期ではFとBが多く，そしてⅤ期ではGとBが多くみられた（目的1）。

3. このように事例Aと事例Bとの治療者像の差異がみられることについては，治療期間の長・短によるものか，治療者との性の組み合わせのちがいによるものかについては，今後の検討課題として残された。

4. 本研究に用いた分類カテゴリーは，A′のように若干の分類しにくいものもみられたが，おおむね両事例の場合でも分類ができ，先の分類カテゴリーの客観性と有効性は確められた（目的2）。

5. 最後に治療関係と治療効果について，夢に現れた自己像をもとに評価したところ，事例Aは十分に自己統合しているが，事例Bはまだ自己未統合であり，多分に幼児的段階にとどまっていることがわかった。事例Bはまだ治療を継続しなければならないことが確められた（目的3）。

文　　献

Gendlin, E. T. 1964 A theory of personality change. (In Worchel, P. & Byrne, D. (eds.) *Personality Change.* New York; John Wiley & Sons. Pp. 100 – 148.)

河合隼雄　1984　ケース・スーパーヴィジョンでのコメント　京都大学一泊臨床心理学研究会（京都）.

前田重治　1981　治療のための面接　2.心理面接の構造（前田重治　心理臨床――精神科臨床と心理臨床家. 星和書店　Pp. 144－151.）

前田重治　1984　〔特集――夢〕フロイト派の立場から. 季刊精神療法，**10**（1），17－22.

小此木啓吾　1983　フロイトにおける夢判断とその理論. 精神分析研究，**27**（4），257－260.

小此木啓吾　1984　ケース・スーパーヴィジョンでのコメント　京都大学一泊臨床心理学研究会（京都）.

田畑　治　1977　成人の援助機能　（田畑　治・村山正治編　来談者中心療法（講座 心理療法 1）福村出版　Pp. 122－123.）

田畑　治　1983　心理治療過程に現れた治療者像とその機能（Ⅰ）――ある重症対人恐怖症者の夢分析を通して――. 名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科――. **30**，99－119.

田畑　治　1984　〔特集――父親〕治療の中での父性機能・カウンセリング. 季刊精神療法，**10**（2），130－133.

鑪　幹八郎　1983　夢解釈の技法とその発展. 精神分析研究，**27**（4），261－263.

（1984年7月20日　受稿）

ABSTRACT

THE THERAPIST-IMAGE AND ITS FUNCTIONS AS SEEN IN THE PSYCHOTHERAPEUTIC PROCESSES (II)

– Through dream-analysis of male and female clients having the "experience of lost motherhood" –

Osamu TABATA

How a client perceives or experiences a therapist in the psychotherapeutic processes? This study aims at the therapist-images which are reflected or emerging from the dream-analysis. The author have three purposes in this article. Firstly, through a dream-analysis of the two, male and female, clients who are the same age with the therapist, and who have the "experience of lost motherhood", we clarify the actions and functions of the therapist in dreams at each therapy stages. Secondly, we re-examine the objectivity and the availability or validity of the categories of therapist's function which was reported in the former volume (TABATA, 1983). And thirdly, we also evaluate the quality of psycho-therapeutic relationship and effectiveness or outcome of therapy in relation to the "self-images" of each clients.

The clients used in this study were these : Case A was a married man who was forty years old at the intake, and the therapy was continued for more than 4 years. And Case B was a married woman who was forty-one years old at the intake, and the therapy was continued for more than 2 years. Both cases were diagnostically "identity disorder" which were within the range of psychoneurotic disease.

The results were as followings:

1. In Case A, the total dreams were reported forty-six in all, of which the transformed therapist-images were fifteen, and the rate in all dreams was 32.6%. In Case B, the total dreams were reported fifty in all, of which the therapist-images were fourteen, and the rate in all dreams was 28%.

2. Concerning the therapist-images and the transition of functions to each stages, the Case *A* showed mainly *D* (function of "power and force") from stage I to stage III; *B* (function of "motherhood"), E (function of operator or technician) and *C* (function of "discipline or guide") in stage IV; *F* (function of "co-existence or collaboration") in stage V; and *B* or *H* (function of "soul or religious atmosphere") in the final stage VI. On the contrary, the Case B showed mostly *F* and sometimes *G* (function of "common sense") from stage II to stage III; *F* and *B* in stage IV; and *G* and *B* in stage V. (Purpose 1)

3. The reasons of difference with therapist-images in two cases may result from the length of therapy term or sex-matching (i.e. homo-sexual or hetero-sexual pairs). These results, however, must be examined to further research.

4. The former categories of therapist functions were minimumlly modified, so the objectivity and the availability or validity were nearly verified. (Purpose 2)

5. Finally, the Case A was attained fully self-integration, and the Case B had not yet obtained self-integration through the self-images of dreams reported in the dream-analysis. The later case stayed at early or later infatile age. Therefore, it is pointed out that the psychotherapy with the Case B must be continued more further times. (Purpose 3)